

『經典釋文』と朱熹注音

森 賀 一 惠

富山大学人文学部紀要第57号抜刷

2012年8月

『經典釋文』と朱熹注音

森 賀 一 恵

目次

- 一 はじめに
- 二 『經典釋文』と朱熹注釋の多音字注音
- 三 おわりに——調査結果

一 はじめに

本稿は、『經典釋文』と朱熹の注釋に附される音注を比べることによって、多音字の注音の時代による變化をみようとするものである。朱熹の注釋といえば、『四書集注』『詩集傳』なので、ここで扱うのは『毛詩』、『論語』、『禮記』大學、中庸の經文に附された音注である。タイトルには「朱熹注音」としたが、これは朱熹が附けた音注という意味ではなく、朱熹の注釋に附けられている音注のことである。朱熹の注釋に附される音注というのはもちろん朱熹が附けたものとは限らない。例えば、『詩集傳』は『宋史』藝文志には「二十卷」と著録されているが、現在は八卷本も傳わり、二十卷本と八卷本の音注は全く異なる。四部叢刊三編所収の二十卷本『詩集傳』の注音は『經典釋文』と呉棫の『毛詩補音』に依據していて原形に近く最も學術的價値が高いが、八卷本は全く原貌を留めていないという説がある¹⁾。しかし、現行の朱熹の注釋書に見える音注が南宋以降のものであることは間違いない。以前、現在見られるような精緻な四聲別義の體系が整ったのは宋以降のことだろうという假説²⁾を述べたが、今回の調査はその説を検證するためのものである。

具體的な作業としては、『釋文』毛詩音義、論語音義、禮記音義（大學、中庸）と『詩集傳』二十卷本、八卷本、『論語集注』、『大學章句』、『中庸章句』で音注が附される多音字72字を選んで、音と意味の對應を考えながら、『釋文』と朱熹注の音注の特徴をみる。配列は現代語の常用音の拼音による。

表を作成するに際して使用したテキストは、通志堂經解本『經典釋文』、四部叢刊三編本『詩集傳』（二十卷）、四庫全書本『詩集傳』（八卷）、中華書局本『四書章句集注』である。必要に

1) 包麗虹「朱熹《詩集傳》文献学研究」（浙江大學博士論文）の説、論文は未見。

2) 森賀 2000

應じて、上海古籍影北京圖書館藏宋刊本『經典釋文』（校勘記では「北圖本」と稱する）、鳳凰出版社本『詩集傳』（二十卷）、怡府藏板本『詩集傳』（八卷）、上海古籍出版社・安徽教育出版社『四書章句集注』を参照した箇所もある。

表の「被注箇所」欄は『經典釋文』が掲げる箇所を用いた。「朱熹注音」欄は、『毛詩』なら『詩集傳』（左欄が二十卷本、右欄が八卷本）、『論語』なら『論語集注』、大學なら『大學章句』、中庸なら『中庸章句』の音注である。

なお、多音字の読み分けや『釋文』論語音義、禮記音義、『四書集注』について述べる部分は、一々明記しないが、森賀 2010、森賀 2011 に據る場合がある。

二 『經典釋文』と朱熹注釋の多音字注音比較

(1) 比 bǐ	(26) 勞 láo	(50) 爲 wéi
(2) 辟 bì	(27) 樂 lè	(51) 聞 wén
(3) 別 bié	(28) 離 lí	(52) 下 xià
(4) 藏 cáng	(29) 量 liáng	(53) 夏 xià
(5) 長 cháng	(30) 令 lìng	(54) 先 xiān
(6) 朝 cháo	(31) 難 nán	(55) 鮮 xiān
(7) 乘 chéng	(32) 妻 qī	(56) 相 xiāng
(8) 出 chū	(33) 強 qiáng	(57) 行 xíng
(9) 除 chú	(34) 取 qǔ	(58) 焉 yān
(10) 處 chù	(35) 去 qù	(59) 厭 yàn
(11) 傳 chuán	(36) 三 sān	(60) 衣 yī
(13) 道 dào	(37) 喪 sāng	(61) 易 yì
(14) 弟 dì	(38) 上 shàng	(62) 飲 yǐn
(15) 惡 è	(39) 少 shǎo	(63) 於 yú
(16) 夫 fū	(40) 舍 shě	(64) 雨 yǔ
(17) 復 fù	(41) 射 shè	(65) 語 yǔ
(18) 好 hǎo	(42) 勝 shēng	(66) 與 yǔ
(19) 幾 jǐ	(43) 省 shěng	(67) 予 yǔ
(20) 假 jiǎ	(44) 施 shī	(68) 遠 yuǎn
(21) 間 jiān	(45) 食 shí	(69) 知 zhī
(22) 見 jiàn	(46) 使 shǐ	(70) 治 zhì
(23) 將 jiāng	(47) 說 shuō	(71) 中 zhōng
(24) 降 jiàng	(48) 孫 sūn	(72) 重 zhòng
(25) 近 jìn	(49) 王 wáng	

(1) 比 bǐ

『廣韻』上平六脂・毗（房脂切）小韻に「比，和也，並也，又匕鼻邲三音」，上五旨・匕（卑履切）小韻に「比，校也，並也，邲，…又毗鼻邲三音」，去六至・鼻（毗至切）小韻に「比，近也，又阿黨也，又房脂，必履，扶必三切」，痺（必至切）小韻に「比，近也，併也」，入五質・上邲（毘必切）小韻に「比，比次，又毗毗鼻三音」。『釋文』『羣經音辨』卷三・辨字同音異・比部に「比，密也（毗至切），比，方也（必以切），比，和也（蒲之切）比，次也（蒲必切）比，朋也（必一切）」，卷六・辨字音清濁に「比，近也（卑履切），近而親之曰比（毗志切）。『經典釋文』（以下、『釋文』と略す）では「輔」「親」「擇善而從」「阿黨」などと訓じられる「たすける」「したしむ」「おもねる」などの意の「比」に「毗志反」，「迫」「密」と訓じられる「接する」の意の「比」に「必里反」という反切が附される。二十卷本『詩集傳』（以下、「二十卷本」と略す）は『釋文』と同じ，『論語集注』（以下、『集注』と略す）は『釋文』とは異なるものの反切で音を記すが，『詩集傳』八卷本（以下、「八卷本」と略す）は直音または聲調で音を記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
			二十卷本詩集傳	八卷本詩集傳
			論語集注	
			大學章句・中庸章句	
唐・杕杜	相比	毗志反，下文及注同	(傳)	
唐・杕杜	胡不比 ³⁾	×（上文に「下文及注同」）	毗志反	音鼻
小雅・六月	比物	毗志反，齊同也	毗志反	去聲
小雅・正月	洽比 ⁴⁾	毗志反	毗志反	音鼻
大雅・皇矣	比 ⁵⁾	必里反	必里反	音匕
大雅・皇矣	比	×	毗至反	去聲
周頌・良耜	其比 ⁶⁾	毗志反	毗志反	去聲
爲政	不比 ⁷⁾	毗志反	必二反	
里仁	與比 ⁸⁾	毗志反	必二反	
先進	比及	必利反，下同	必二反，下同	

(2) 辟 bì

『廣韻』入二十二昔・擗（房益切）小韻に「辟，便辟，又法也，…」，辟（必益切）に「爾雅，皇，王，后，辟，君也，亦除也，…」，僻（芳辟切）小韻に「辟，上（僻）同，見詩」。三音すべて昔韻で，奉母なら「便辟」の「辟」または「法」の意，非母なら「きみ」の意，敷母なら「僻」に通じる。『羣經音辨』卷四・辨字同音異・辟部に「辟，法也（部益切），辟，君也（必益切），辟，違也（音避，

3) 「胡不比」の「比」を鄭箋は「輔」と訓ずる。

4) 「洽比」の「比」を毛傳は「親」で釋す。

5) 毛傳「擇善而從曰比」

6) 鄭箋は「比」を「相比迫也」と釋す。

7) 『集解』引く孔安國説に「阿黨曰比」。

8) 邢疏に「比，親也」。

禮還辟辟拜⁹⁾ 辟, 止也 (音弭, 禮有由辟焉), 辟, 縁也 (音裨, 禮素帶終辟¹⁰⁾), 辟, 傾首也 (音僻, 禮負劔辟呵詔之¹¹⁾, 辟呵謂傾頭與語也), 辟, 衣褶也 (補麥切, 禮絞一幅不辟¹²⁾, 又壁脾二音), 辟, 喻也 (音譬, 春秋傳, 今辟於艸木, 今本作譬¹³⁾)。『廣韻』の三音, 「避 (昆義切) (去聲)」「弭 (綿婢切) (上聲)」「裨 (府移切) (平聲)」「譬 (匹賜切) (去聲)」などに通じる異音が挙げられている。『釋文』では、「きみ」の意の「辟」は「必亦反」, 「便辟」の「辟」は「婢亦反」, 「僻」に通じる「辟」は「匹亦反」, 「避」に通じる「辟」は「音避」とする。二十卷本も反切と直音を併用し, 八卷本では直音, 『集注』では「避」に通じる「辟」については聲調で音を示すが, 『大學章句』『中庸章句』(以下, 總稱する場合は『章句』と略す)では音は附さず, 意義を示す。なお, 現代漢語(普通話)では, 「きみ」の意の「辟」は bi, 「法」の意の「辟」は pì である。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
邶・柏舟	寤辟	本又作擘, 避亦反	避亦反	音關
魏・葛屨	左辟	音避, …, 一音婢亦反	音避	音避
小雅・桑扈	百辟	音璧	音璧	音璧
大雅・棫樸	辟王	音璧, …, 注及下同	音璧	音璧
大雅・皇矣	辟之	婢亦反, 沈必亦反	婢亦反	音關
大雅・靈臺	辟	音璧	音璧	音璧
大雅・文王有聲	維辟	音璧, …, 注及下皆同, 又音婢亦反, …	×	×
大雅・假樂	百辟	音璧	×	×
大雅・板	立辟	婢亦反	×	同上 (音僻)
大雅・蕩	之辟	必亦反, …, 沈云毛音婢益反	必亦反	音璧
大雅・蕩	多辟	匹亦反, …, 本又作僻	匹亦反	音僻
大雅・烝民	百辟	音璧	音璧, 無韻, 未詳	音璧
大雅・韓奕	戎辟	音璧	音璧	音璧
大雅・江漢	辟	×	音關	音關
大雅・召旻	辟國	音關	音關	音關
周頌・烈文	辟公	音璧, 注下皆同	音璧, 下同	音璧
周頌・離	辟公	音璧	音璧	音璧
周頌・載見	辟王	音璧	音璧	音璧
商頌・殷武	多辟	音璧, 下同, …, 王音僻	音璧	音璧
八佾	辟公	必亦反	×	
先進	也辟	匹亦反	婢亦反	
憲問	辟世	音避, 下同	去聲, 下同	
季氏	便辟	婢亦反	婢亦反	
微子	辟之	×	去聲	
微子	辟人	音避	去聲	
中庸 22	知辟	音避, 注知辟、辟害皆同	與避同	
中庸 53	辟如	音譬, 下同	辟、譬同	
中庸 164	辟如	音譬, 下同	辟音譬	

9) 『禮記』曲禮上。『釋文』に「辟辟, 上扶亦反, 下辟音避」。

10) 『禮記』玉藻。鄭注に「辟讀如裨, …」。

11) 『禮記』曲禮上。「辟呵謂傾頭與語也」は鄭注。

12) 『禮記』喪大記に「絞紛如朝服, 絞一幅為三, 不辟紛五幅, 無紘」。

13) 『春秋左氏傳』襄公八年傳に「今譬於草木」。

中庸 203	百辟	音璧，君也，注同	×
大學 53	而辟	音譬，下及注同，謂譬喻也	讀為僻
大學 85	辟則	匹亦反，注同	讀為僻

(3) 別 bié

『廣韻』入十七薛・別（皮列切）に「別，異也，離也，解也，……，又彼列反」，廖（方列反）に「別，分別」。『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「別，辨也（彼列反），既辨曰別（皮列反）」。「離」などと同じように、「別つ」という場合と，別れた状態を指す場合とで音が異なる。『羣經音辨』は別小韻の又切「彼列反」（幫母）を採り，「方列反」（非母）を採らない。いずれにしる二音とも入聲なので，『集注』、『章句』ともに聲調でなく反切を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
爲政	以別	彼列反	彼列反
子張	以別	彼列反	必列反
中庸 170	有別	彼列反	彼列反

(4) 藏 cáng

『廣韻』下平十一唐・藏（昨郎切）に「隱也，匿也，…又徂浪切」，去四十二宕・藏（徂浪切）に「通俗文曰，庫藏曰帑，…又徂郎切」，『羣經音辨』卷六に「藏，入也（徂郎切），謂物所入曰藏（徂浪切）」。「如字」は「藏る」^{かく}「藏む」^{おさ}の意の平聲の「藏」で，『釋文』では「藏」^{くら}の意の去聲の「藏」に反切が附く。現代語も「藏める」という意味なら cáng，「藏」という意味なら zàng と読み分けられている。二十卷本は『釋文』と同じく反切を用いるが，八卷本、『中庸章句』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
小雅・十月	多藏	才浪反	才浪反 去聲
中庸 134	寶藏	才浪反	去聲

(5) 長 cháng

『廣韻』下平十陽・長（直良切）に「久也，遠也，常也，永也，…，又直向、丁丈二切」，上三十六養・長（知丈切）に「大也，…，又直張切」，去四十一漾・仗（直亮切）小韻に「長，多也，又直良切」。つまり，^{なが}「長い」と讀む場合は平聲，^た「長ける」と讀む場合は上聲，具體的に數値を挙げて長さをいう場合には去聲ということになる。『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「長，永也（持良切，對短之稱），揆長曰長（下持亮切，長幾分幾寸是也）」というが，『羣經音辨』は上聲の「長」については觸れない。現代語では「長い」も「長さ」第一聲で區別はないが，平聲（cháng）と上聲（zhǎng）の音と意味の對應は変わっていない。二十卷本は『釋文』と同じく反切を用いて音を示すが，八卷本、『集注』、『章句』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
小雅・蓼莪	五長	張丈反, 下皆同	丁丈反	上聲
小雅・巧言	用長	丁丈反, 又直良反	丁丈反, 叶直良反	上聲叶直良反
大雅・大明	長子	張丈反	丁丈反	上聲
大雅・皇矣	克長	×	丁丈反	×
大雅・皇矣	不長	×	丁丈反	(圈点上声)
公冶長	長	如字	×	
鄉黨	長一	直亮反	去聲	
先進	長乎	丁丈反	上聲	
憲問	長無	丁丈反	上聲	
微子	長幼	丁丈反	上聲	
大學 63	事長	丁丈反, 下長長并注同	上聲	
大學 71	長長	× (上文に「丁丈反, 下長長并注同」)	上聲	
大學 116	長國	丁丈反	上聲	

(6) 朝 cháo

『廣韻』下平四宵・朝 (陟遙切) に「早也, …, 又直遙切」, 暈 (直遙切) 小韻に「朝, 朝廷也, …」, 『羣經音辨』卷六・辨彼此異音に「朝, 旦日曰朝 (陟遙切), 且見曰朝 (直遙切)」。現代語の「朝廷」「朝代」などの「朝」(cháo), 「朝夕」の「朝」(zhāo) も同じ。『釋文』では, 「如字」は「朝^{あさ}」の方で, 「朝廷」「朝見」の「朝」の方に「直遙反」の音が附く。二十卷本は反切に少し直音の注が混じり, 『集注』は一箇所のみ反切, 八卷本, 『章句』はすべて直音で注される。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
衛・碩人	以朝	直遙反	直遙反, 叶直豪反	音潮, 叶直豪反
齊・雞鳴	朝既	直遙反	音潮	音潮
檜・羔裘	以朝	直遙反	直遙反, 叶直勞反	音潮
小雅・沔水	朝宗	直遙反	直遙反	音潮
小雅・雨無正	朝夕	直遙反, 舊張遙反	×	×
小雅・采芣	來朝	直遙反, 篇内皆同	(詩序釋文)	(詩序釋文)
小雅・采芣	朝	× (詩序釋文にあり)	音潮	音潮
小雅・漸漸之石	皇朝	直遙反	×	×
大雅・緜	來朝	直遙反	×	×
公冶長	於朝	直遙反	音潮	
雍也	宋朝	張遙反	×	
鄉黨	朝	直遙反	直遙反	
子路	退朝	直遙反	音潮	
憲問	而朝	直遙反	音潮	
憲問	市朝	直遙反	音潮	
微子	不朝	直遙反	音潮	
子張	孫朝	直遙反	音潮	
子張	於朝	直遙反	音潮	
中庸 110	朝聘	直遙反	音潮	

(7) 乘 chéng

『廣韻』下平十六蒸・繩 (食陵切) 小韻に「乘, 駕也, 勝也, 登也, 守也, 說文作乘, 覆也, 又姓, ……」, 去四十七證・乘 (實證切) 小韻に「車乘也, 實證切, 又食陵切」, 『羣經音辨』

卷六・辨字音清濁に「乗，登車也（食陵切），謂其車曰乘（食證切）」。「乗る」^{しの}「乗ぐ」^{まも}「乗る」などと動詞に読む場合は平聲，戦車などの乗り物を指す名詞や「千乗」などの車を数える量詞なら去聲のようである。『釋文』は去聲の「乗」に「繩證反」という反切を付け，二十卷本も概ねそれに倣うが，八卷本，『集注』は聲調で音を記す。なお，現代語では「のる」は chéng，量詞は shèng で聲母が異なる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
鄭・大叔于田	乘乘馬	上如字，（下繩證反），後句例爾	×	×
鄭・大叔于田	乘乘馬	（上如字，）下繩證反，後句例爾	下繩證反	下去聲
秦・渭陽	乘黃	繩證反	成證反	去聲
陳・株林	乘馬	繩證反，下…並同	繩證反	去聲
陳・株林	乘（我）	×	平聲	平聲
小雅・六月	十乘	繩證反	繩證反	去聲
小雅・鴛鴦	乘馬	王徐繩證反，…，鄭如字，下同	繩證反	去聲
小雅・采芣	乘馬	繩證反	繩證反	去聲
大雅・崧高	乘馬	繩證反	繩證反	去聲
大雅・韓奕	乘馬	繩證反，…，下百乘亦同	繩證反	去聲
魯頌・有駘	乘黃	繩證反，下同	繩證反	去聲
魯頌・閟宮	千乘	繩證反	繩證反	去聲
商頌・玄鳥	十乘	繩證反	繩證反	圈点去声
學而	千乘	繩證反	去聲	
公冶長	千乘	繩證反	去聲	
公冶長	十乘	繩證反	去聲	
先進	千乘	繩證反	去聲	
大學 114	馬乘	徐繩證反，下及注同	（乘，斂並）去聲	

(8) 出 chū

『廣韻』去六至・出に「尺類切¹⁴⁾，又昌律切」，入六術・出に「進也，見也，遠也，赤律切，又赤季切」，去聲の「出」には，釋義はない。『羣經音辨』卷二・辨字同音異に「出，進也（尺律切），出，去也（音黜，春秋傳何故出君¹⁵⁾）」とし，「黜」に讀ませる「出」を異音として挙げるが，去聲の音は載せない。『釋文』は「出納」の「出」に去聲の反切を付ける。『釋文』では「龔」に讀ませる「出」の他は始めに去聲の反切を挙げる一例も「又如字」とするほか，全て「如字」で又音としてのみ去聲の反切を挙げる。「出納」の「出」も烝民の『釋文』は「如字」としており，「出」が多音字といえるか否かは疑わしい。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
衛・伯兮	出日	如字，沈推類反	×	×
小雅・出車	出車	如字，沈尺遂反	×	×
小雅・雨無正	是出	尺遂反，音龔	尺遂反	音脆
小雅・大東	出涕	如字，徐尺遂反	×	×
小雅・賓之初筵	俾出	如字，徐尺遂反	×	×

14) 『集韻』は「自内而外也」。

15) 『春秋左氏傳』昭公三十一年傳

小雅・都人士	出言	如字	×	×
大雅・板	出	如字，徐尺遂反	×	×
大雅・烝民	出納	如字	×	×
子罕	不出	如字，舊尺遂反，注同	×	
堯曰	出納	尺遂反，又如字	去聲	

(9) 除 chú

『廣韻』上平九魚・除（直魚切）小韻に「階也，又去也，直魚切」，去九御・箸（遲倨切）小韻に「除，去也，見詩¹⁶⁾」。階^{きざし}の意なら平聲だが、「去」という釋義は平聲、去聲どちらにも見える。『羣經音辨』卷五・辨字同音異に「除，階也（直魚切），除，去也（音注，詩日月其除¹⁶⁾，毛萇讀又直魚切），除，舒也（式朱切，詩日月其除，鄭康成讀又音餘¹⁷⁾）。『羣經音辨』は階^{きざし}の意なら平聲、「のぞく」の意なら去聲とする。『釋文』では「去」の意の「除」に反切が附けられ、二十卷本も概ねそれを踏襲するが、八卷本は聲調で音を附ける。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
唐・蟋蟀	其除 ¹⁸⁾	直慮反	直慮反	去聲
小雅・天保	不除 ¹⁹⁾	治慮反	直慮反	去聲
小雅・斯干	攸除	直慮反，去也	直慮反	去聲
小雅・小明	方除 ²⁰⁾	直慮反，如字，若依爾雅，則宜餘舒二音	去聲	去聲

(10) 處 chù

『廣韻』上八語・杵（昌與切）に「處，居也，止也，制也，息也，留也，定也，說文又作処，…」去九御・處（昌據切）に「處所也」，『羣經音辨』卷六に「處，居也（昌呂切），謂所居曰處（昌據切）」。現代語と同じく、「處^{ところ}」と讀めば去聲（chù）、「處る」と讀めば上聲（chǔ）である。『釋文』では「處る」の「處」に反切を附け、二十卷本もそれに倣うが、八卷本、『集注』はそれを聲調で記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
召南・殷其雷	處	尺煮反	尺煮反	上聲
邶・日月	古處	昌慮反，又昌呂反	昌呂反	×
邶・簡兮	在前上處	×	×	上聲
小雅・小明	之處	昌慮反	×	×
里仁	不處	昌呂反，後不音者及注同	上聲	

16) 唐風・蟋蟀

17) 表中の小雅・小名の釋文参照。

18) 鄭箋は「除」を「過去」と釋す。

19) 毛傳は「除」を「開也」と訓ずる。

20) 毛傳に「除，除陳生新也」。

(11) 傳 chuán

『廣韻』下平二仙・椽（直攀切）に「傳，轉也」，去三十三線・傳（直戀切）に「訓也，釋名²¹⁾曰，傳，傳也，以傳示後人也」，轉（知戀切）に「傳，郵馬，釋名²²⁾曰，傳，傳也，人所止息去，後人復來，轉轉相傳，無常人也」，『羣經音辨』卷六に「傳，授也（直專切），記所授曰傳（直恋切）」。「羣經音辨」は、『廣韻』が載せる三音のうち、驛馬の「傳」については觸れず、「つたえる」の意の平聲と「經の注釋」「傳記」などの意の去聲の區別のみを記す。この読み分けは現代語も同じで、「傳える」の意なら chuán, 「經の注釋」「傳記」などの意なら zhuàn である。『釋文』は平聲の「傳」に反切を附すが、『集注』は一箇所のみだが聲調で記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
學而	傳不	直專反	平聲
子張	先傳	直專反	×

(12) 從 cóng

『廣韻』上平三鍾・從（疾容切）に「就也，…」，樅（七恭切）小韻に「從，從容」，去三用・從（疾用切）に「隨行也」。『廣韻』によれば，從母鍾韻の「從」が「つく」，清母鍾韻が「從容」の「從」，從母用韻の「從」が「隨行」の意，「從者」の「從」である。『羣經音辨』卷三・辨字同音異に「從，隨也（在容切），從，箠其後也（才用切），從，南北也（則庸切，詩衡從其畝²³⁾），從容，緩也（七容切，禮從容中道²⁴⁾），從，放也（音縱，禮欲不可從²⁵⁾），從從，高大也（音崇，禮爾無從從爾²⁶⁾），又仕江、作孔二切）從容，擊也（音春，禮善待問，如撞鍾，待其從容，然後盡其聲²⁷⁾）。『羣經音辨』は『廣韻』の三音のほかにも、『釋文』に見える「從」の音を四つ載せる。清母鍾韻の「從容」の「從」は規則変化では cōng になるはずだが，現代語では「つく」などの場合と同じく cóng と讀むのが普通で，「從者」の「從」の zòng も『新華字典』などでは「旧讀」とされる。『釋文』は音を反切で記し，二十卷本、『章句』も反切で記すが，『集注』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
齊・南山	從	足容反	子容反	音宗
齊・敝笱	其從	才用反，注下皆同	才用反	去聲
大雅・韓奕	從之	才用反，…，又如字	×	×

21) 釋典藝

22) 釋宮室

23) 齊風・南山

24) 『禮記』中庸

25) 『禮記』曲禮上

26) 『禮記』檀弓。阮元本は「無」を「毋」に作る。

27) 『禮記』學記「善待問者，如撞鐘，叩之以小者則小鳴，叩之以大者則大鳴，待其從容然後盡其聲，不善荅問者反此」鄭注「從讀如富父春戈之春」。

爲政	(從心)	×	如字
八佾	從之	何讀爲縱, 子用反, 放縱也	音縱
八佾	從者	才用反	去聲
公冶長	從	×	去聲
先進	從我	才用反	去聲
先進	從者	才用反	去聲
顔淵	從遊	才用反	×
衛靈公	從者	才用反	去聲
微子	子路從	才用反	×
中庸 115	從容	上七容反	七容反

(13) 道 dào

『廣韻』では「道」は上聲のみ(上三十二皓・道(徒皓切)),「導」は去聲のみ(去三十七号・導(徒到切))。濁音(定母)なので規則変化だと現代語ではいずれも第四聲になるはずだが、現代語では「道」は dào、「導」は dǎo と読み分けられている。『釋文』は「導」に讀ませる「道」に直音で「音導」とするが、『集注』は一箇所を除いて、それを聲調に置き換えている。『中庸章句』に見える 1 例は、『釋文』と同じく「音導」とする。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
學而	道	音導, 本或作導	去聲
爲政	道之	音導, 下同	音導, 下同
顔淵	善道	導也	去聲
子張	道之	音導	去聲
中庸 123	自道	音導, 注自道同	音導

(14) 弟 dì

『廣韻』上十一霽・弟(徒禮切)に「兄弟, 爾雅²⁸⁾曰, 男子先生爲兄, 後生爲弟」, 去十二霽・弟(特計切)に「次第, 說文²⁹⁾本作弟, 韋束之次第也, 今爲兄弟字, …」「弟, 見上注, 又音上聲」「悌, 孝悌, 又音上聲」。『廣韻』は『說文』を引いて「弟」の本義が「次第」の「弟」, 順序の意であるとし、「兄弟」の「弟」の音は上聲, 「次第」の「第」, 「孝悌」の「悌」に通じる音は去聲とする。『釋文』は「悌」に通じる「弟」に「大計反」または「音悌」という音を付け、『詩集傳』二十卷本、八卷本も反切を用いるが、『集注』、『章句』は聲調に置き換える。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
邶・谷風	如兄如弟	×	待禮反	待禮反
邶・泉水	兄弟	×	待禮反	×
齊・載驅	弟	如字, 或音待易反	叶待禮反	叶待禮反
小雅・常棣	弟	×	待禮反	待禮反
小雅・蓼蕭	(豈)弟	如字, 本亦作悌, 音同, …, 後皆放此	×	×

28) 釋親

29) 五下・弟部

小雅・蓼蕭	(宜) 弟	×	待禮反	×
大雅・旱麓	弟	亦作悌，徒禮反，一音待，…，後豈弟皆同	×	圈點去聲
大雅・行葦	弟	×	待禮反	×
學而	孝弟	大計反，本或作悌	去聲	
學而		×	上聲	
學而	則弟	音悌，本亦作悌	去聲	
子路	稱弟	亦作悌同，大計反	去聲	
憲問	弟	大計反	去聲	
大學 62	弟者	音悌	去聲	
大學 72	興弟	音悌	去聲	

(15) 惡 è

『廣韻』上平十一模・烏(哀都切)小韻に「惡，安也」，去十一暮・汚(烏路切)「惡，憎惡也，又烏各切」，入十九鐸・惡(烏各切)に「不善也，說文曰過也，…，又烏各切」。『廣韻』によれば、「惡んぞ」(疑問や反語を示す助辞)なら平聲，「惡む」なら去聲，「惡」「悪い」なら入聲であるが，現代語でも疑問詞、感嘆詞は wū，「にくむ」は wù，「わるい」は è と読み分けている。『羣經音辨』では，卷六・辨字音清濁に「惡，否也(烏各切)，心所否謂之惡(烏路切)」とあり，平聲の「惡」については觸れていない。『釋文』では入聲の「惡」が「如字」で，平聲の「惡」は意味の通じる「烏」を用いて直音で「音烏」とし，去聲については反切を用いる。二十卷本は去聲四例について反切を用いるが，八卷本、『集注』、『章句』は聲調に置き換える。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
鄭・遵大路	惡	烏路反	烏路反	去聲
小雅・節南山	惡	×	烏路反	去聲
大雅・假樂	惡	烏路反，又如字	烏路反	去聲
周頌・振鷺	惡	×	烏路反	×
里仁	能惡	烏路反，注及下同	去聲	
里仁	無惡	如字，…，又烏路反	如字	
里仁	惡	×	去聲	
里仁	惡乎	音烏	平聲	
里仁	惡不仁	烏路反	去聲	
先進	惡夫	烏路反	去聲	
顏淵	惡	烏路反	去聲	
子路	惡	烏路反	去聲	
衛靈公	衆惡之	烏路反	去聲	
陽貨	惡紫	烏路反	去聲	
陽貨	有惡	烏路反，除稱人之惡，注爲惡三字餘同音	去聲，下同	
陽貨	見惡	烏故反	去聲	
子張	惡居	烏路反	去聲	
中庸 105	好惡	(呼報反，)下烏路反，又並如字，…	去聲	
中庸 161	惡	×	去聲	
中庸 186	惡其	烏路反	去聲	
中庸 195	無惡	×	去聲	
大學 8	如惡惡	上烏路反，下如字	(惡好，)上字皆去聲	
大學 54	賤惡	烏路反，下惡而知同	去聲	

大學 58	其惡惡	上如字, 下烏路反	×
大學 76	所惡	烏路反, 下皆同	去聲
大學 82	惡	× (上文に「烏路反, 下皆同」)	(好惡並) 去聲, 下並同
大學 101	以惡	烏路反, 下能惡人同	× (上文に「去聲, 下並同」)
大學 107	之所惡	烏路反, 下同	× (上文に「去聲, 下並同」)

(16) 夫 fū

『廣韻』上平十虞・扶(防無切)「夫, 語助」跗(甫無切)「夫, 丈夫, …」, 『羣經音辨』卷四に「夫, 丈夫也(甫無切), 夫, 語辭也(防無切)」。いずれも, 「夫」^{おつと}「丈夫」^{おとこ}の意味では非母, 語辭の場合は奉母で, 現代語でも前者は fū, 後者は fú である。前者が「如字」で, 語辭の「夫」について, 『釋文』は「音符」とし, 『集注』, 『章句』は「音扶」とする。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
雍也	矣夫	音符	音扶
雍也	矣夫	音符	音扶
雍也	夫仁	音符	音扶
述而	是夫	音符	音扶
泰伯	免夫	音符	音扶
子罕	矣夫	音符	音扶
子罕	斯夫	音符	音扶
子罕	夫	音符	音扶
先進	夫人	音符 (, 下章夫人同)	音扶
先進	夫	× (上章「夫人」釋文に「下章夫人同」)	音扶
先進	夫人	音符	音扶, 下同
先進	惡夫	音符	× (上文「夫」注に「音扶, 下同」)
先進	夫三	音符	音扶
顏淵	夫何	音符	音扶
顏淵	矣夫	音符	重出 (雍也)
顏淵	夫達	音符, 下同	音扶, 下同
子路	夫如是	音符	音扶
子路	善夫	音符	音扶
憲問	矣夫	音符	音扶
憲問	夫如是	音符	音扶
憲問	告夫	音符, 下同	音扶, 下告夫同
憲問	夫我	音符	音扶
憲問	夫	音符	音扶
衛靈公	夫何	音符	音扶
衛靈公	夫然	音扶	音扶
衛靈公	今亡矣夫	音符	音扶
季氏	夫顛與	音符, 下今夫、疾夫、夫如是並同	音扶
季氏	(今夫)	× (上文「夫顛與」釋文に「音符, 下今夫、……並同」)	音扶
季氏	疾夫	音符	音扶
季氏	(夫如是)	× (上文「夫顛與」釋文に「音符, 下……夫如是並同」)	音扶
季氏	故夫	音符	音扶
陽貨	夫召	音符	音扶
陽貨	夫詩	音符	音扶

陽貨	食夫	音符, 下同	音扶, 下同
微子	夫執	音符	音扶
中庸 13	矣夫	音扶	音扶
中庸 68	此夫	音扶	音扶
中庸 89	夫	×	音扶
中庸 128	今夫	音扶, 下同	音扶
中庸 178	夫焉	×	音扶
大學 111	夫身	音扶	音扶

(17) 復 fù

『廣韻』去四十九宥・復（扶富切）に「又也，返也，往來也，安也，白也，告也，扶富切，又音服」，入一屋・伏（房六切）小韻に「復，返也，重也，亦州名，……」。「又」の意なら去聲だが，去聲、入聲ともに「返」という訓が見える。『羣經音辨』卷一・辨字同音異「復，返也（房六切），復，白也（甫六切），復，再也（扶又切）」によれば，「返る」の意も「白す」の意も入聲だが濁と清の違いがあり，「又」「再びする」などの意なら去聲である。『釋文』は「返」の意の「復」に「音福」（濁音）「音服」（清音）を「再」の意の「復」に「扶又反」という反切を附すが，『羣經音辨』の説くような清濁の使い分けをしているようには見えない。「復」の注音については，『詩集傳』も『集注』も『釋文』と変わらない。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
大雅・緜	復	音福	音福	音福
大雅・公劉	復降	音服，又扶又反	×	×
大雅・桑柔	是復	×	房六反	音伏
述而	不復	扶又反，下同	扶又反	
述而		×（上文「不復」釋文に「下同」）	扶又反	
微子	當復	扶又反	×	

(18) 好 hào

『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「好，善也（呼皓切），嚮所善謂之好（呼到切）」，『廣韻』上三十二皓・好（呼皓切）に「善也，美也」，去三十七号・耗（呼到切）小韻に「好，愛好，…」という。現代漢語（普通語）の hào と hào の意味による読み分けも同じである。『釋文』では去聲の「好」に反切を附け，二十卷本もそれに倣うが，八卷本，『集注』，『章句』は聲調で音を示す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
周南・關雎	好	呼報反（詩序釋文）	×	×
周南・關雎	好	毛如字，鄭呼報反	×	×
邶・日月	相好	呼報反，…，王崔申毛如字	呼報反	呼報反
邶・北風	而好	呼報反，下及注同	呼報反，下同	去聲
衛・木瓜	爲好	呼報反，篇内同	呼報反	去聲
鄭・清人	好利	呼報反	呼報反，叶許候反	叶許候反
鄭・遵大路	好也	如字，…，或呼報反	叶許口反	叶許口反
鄭・女曰雞鳴	而好	呼報反	呼報反	去聲

唐・蟋蟀	好樂	呼報反，下同	呼報反	去聲
唐・羔裘	之好	呼報反	呼報反，叶呼候反	去聲，叶呼候反
唐・有杕之杜	好之	呼報反，下同	呼報反	去聲
小雅・鹿鳴	好我	呼報反	呼報反	去聲
小雅・常棣	好合	呼報反	呼報反	去聲
小雅・彤弓	好之	呼報反	呼報反	去聲
小雅・斯干	相好	呼報反	呼報反，叶許厚反	去聲，叶許厚反
小雅・小明	好是	呼報反	呼報反	去聲
小雅・車牽	好友	呼報反，注下並同	×	×
小雅・車牽	好	×	呼報反	去聲
大雅・桑柔	好是	呼報反	呼報反	×
大雅・烝民	好是	呼報反	呼報反	×
學而	而好	呼報反，下及注同	去聲	
學而	(好學)	×	×	
學而	好	呼報反	去聲	
八佾	之好	呼報反	去聲	
里仁	能好	呼報反	去聲	
里仁	好仁	呼報反	去聲	
公冶長	好勇	呼報反，下同	去聲	
公冶長	而好	呼報反	去聲	
公冶長	好	×	去聲	
雍也	好學	呼報反	去聲	
雍也	好之	呼報反	去聲	
述而	而好	呼報反	去聲	
述而	好謀	呼報反	去聲	
述而	所好	呼報反	去聲	
述而	好	呼報反	去聲	
泰伯	好勇	呼報反	去聲	
泰伯	好	×	去聲	
子罕	好德	呼報反	去聲	
先進	好	呼報反	去聲	
顏淵	而好	呼報反	去聲	
子路	上好	呼報反	去聲	
子路	好	呼報反	去聲	
憲問	上好	呼報反	去聲	
衛靈公	好德如好色	並呼報反，下章好行音同	去聲	
衛靈公	好	×(上章「好德如好色」釋文に「並呼報反，下章好行音同」)	去聲	
衛靈公	衆好之	呼報反	去聲	
陽貨	好從	呼報反	去聲	
陽貨	好仁	呼報反，下同	去聲	
子張	謂好	呼報反	去聲	
子張	之好	如字，舊呼報反	×	
中庸 16	舜好	呼報反，下同	去聲	
中庸 56	好合	呼報反	去聲	
中庸 96	好學	呼報反	去聲	
中庸 104	好惡	呼報反(，下鳥路反)，又並如字，…	去聲	
中庸 151	而好	呼報反，下同	去聲	
大學 10	好好	上呼報反，下如字	(惡好，) 上字皆去聲	
大學 51	所好	呼報反，下故好而知同	去聲	
大學 57	故好而知	×(上文に「呼報反，下故好而知同」)	(……好並) 去聲	

大學 67	所好	呼報反, 注同	去聲
大學 81	所好好	皆呼報反	(好惡並) 去聲, 下並同
大學 98	好之	呼報反	× (上文に「去聲, 下並同」)
大學 106	好人	呼報反, 下皆同	× (上文に「去聲, 下並同」)

(19) 幾 jī

『廣韻』上平八微・祈 (渠希切) 小韻に「幾, 近也, 又居依、居豈二切」, 機 (居依切) 小韻に「幾, 庶幾, 又祈、蟻二音」, 上七尾・蟻 (居豨切) 小韻に「幾, 幾何, 又既豨切」。『羣經音辨』卷二・辨字音同異に「幾, 微也 (居依切, 易, 幾者動之微), 幾, 及也 (音冀, 春秋傳庸可幾乎), 幾, 近也 (渠希切)。「幾^{ちか}し」と讀む場合は群母, 「幾^{きざ}し」「幾^{こいねが}う」などと讀む場合は見母, いずれも微韻で, 「幾何」「未幾」「無幾」などのように「幾^{いく}」と讀む場合は上聲で見母である。現代語では中古音から予想できる通り, 「幾」の場合は jī, それ以外はすべて jī となっている。『釋文』では上聲の「幾」に「居豈反」という音を付け, 二十卷本も概ねそれを襲うが, 八卷本は聲調か直音で音を附す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
齊・甫田	未幾	居豈反	居豈反	上聲
小雅・巧言	幾何	居豈反	音紀, 叶居希反	音紀
小雅・楚茨	幾 ³⁰⁾	音機	音機	音機
小雅・頍弁	無幾	居豈反	居豈反	音己

(20) 假 jiǎ

『廣韻』上三十五馬・檟 (古疋切) 小韻に「假, 且也, 借也, 非眞也, ……」, 去四十禡・駕 (古訝切) 小韻に「假, 借也, 至也, 易也, 休假也, 又古雅切」。羣經音辨』卷三・辨字同音異に「假, 借也, 大也 (工馬切), 假, 與也 (古訝切), 假, 至也 (庚白切, 易王假有廟³¹⁾), 假, 遠也 (音遐), 假, 嘉也 (音暇, 詩假樂成王³²⁾), 卷六・辨彼此異音に「取於人曰假 (古雅切), 與之曰假 (古訝切, 春秋傳不以禮假³³⁾)」。『羣經音辨』によれば, 「借りる」「大きい」などの意なら「工馬切」(『廣韻』の「古疋切」, 「古雅切」), 「貸す」の意なら「古訝切」, 「至る」の意なら「庚白切」(「音格」「古百反」), 「遠い」の意なら同義の「遐」の音, 「嘉」という意なら「音暇」である。六卷では, 「借りる」と「貸す」の音はそれぞれ上聲, 去聲で聲調だけが異なる組み合わせのみが挙げられている。『釋文』では「大」「固」などと訓じられる「假」は「古雅反」, 「至」と訓じられる「假」は「音格」(一箇所のみ「古百反」), 「嘉」と訓じられる「假」は「音暇」とされ, 二十卷本も

30) 「卜爾百福, 如幾如式」, 毛傳に「幾, 期」, 鄭箋に「其來如有期矣」。「幾」を「期」に讀ませている。

31) 萃・卦辭

32) 大雅・假樂

33) 『左傳』莊公十八年傳。杜注に「侯而與公同賜, 是借人禮」。

同様だが、八卷本は「古雅反」を「上聲」に置き換える。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
大雅・文王	假哉 ³⁴⁾	古雅反	古雅反	上聲
大雅・思齊	烈假 ³⁵⁾	古雅反	古雅反	上聲
大雅・假樂	假樂	音暇	中庸、春秋傳皆作嘉	音嘉
大雅・雲漢	昭假 ³⁶⁾	音格，…，沈云，鄭古雅反	音格	音格
大雅・烝民	昭假 ³⁷⁾	音格	音格	音格
周頌・維天之命	假以 ³⁸⁾	音暇	春秋傳作何	×
周頌・噫嘻	假爾 ³⁹⁾	鄭王並音格，…，沈云毛如字	音格	音格
周頌・離	假哉 ⁴⁰⁾	音暇，…，徐古雅反	古雅反	古雅反
魯頌・泮水	假 ⁴¹⁾	古百反	音格	音格
商頌・那	昭假 ⁴²⁾	毛古雅反	音格	×
商頌・烈祖	(禴)假	毛古雅反，…，鄭音格，…，下以假以享同	音格	音格
商頌・烈祖	以假	×	音格	音格
商頌・烈祖	來假	音格	音格	×
商頌・玄鳥	來假	音格，…，下同	音格，下同	音格
商頌・長發	昭假 ⁴³⁾	古雅反，鄭云暇也，徐云，毛音格，鄭音暇。案王肅訓假爲至，格是王音也。…	音格	圈点入声
中庸 199	假	古雅反，大也	假格同	

(21) 間 jiān

『廣韻』上平二十八山・間（古閑切）に「隙也，近也，又中間，亦姓，……，古閑切，又閑澗二音」，去三十一禡（虎覓切）に「間，廁也，瘳也，代也，送也，迭也，隔也，又音平聲」，また上平二十八山・閑（戸間切）に「闌也，防也，禦也，大也，法也，習也，暇也」。『羣經音辨』卷四・辨字同音異に「間，中也（古閑切），間，廁也（古覓切），間，隙也（胡姦切），昌間，魯地也（音簡，春秋傳大莧于昌間⁴⁴⁾，又古閑切）」，卷六・辨字音清濁に「間，中也（古閑切）廁其中曰間（古覓切）」。「釋文」では「閒廁」「離開」など「へだてる」の意の「間」に「閒廁之間」，「閑」に通じる「間」に「音閑」という注が附く。『詩集傳』では「へだてる」の「間」には聲調で音が記される。

34) 毛傳「假，固也」，鄭箋は「堅固」と釋す。

35) 毛傳「假，大也」

36) 毛傳「假，至也」，鄭箋「假，升也」。

37) 鄭箋「假，至也」

38) 毛傳「假，嘉」

39) 鄭箋「假，至也」

40) 毛傳「假，嘉也」

41) 毛傳「假，至也」

42) 毛傳「假，大也」

43) 鄭箋「假，暇」

44) 昭公二十二年經

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
魏・十畝之間	閒閒	音閑，本亦作閑	叶居賢反	叶居賢反
周頌・桓	閒之	閒廁之間	×	×
泰伯	無閒	閒廁之間	去聲	
子罕	病閒	如字	如字	
先進	閒於	閒廁之間	去聲	
中庸 5	閒居	音閑，下同	×	
大學 12	閒居	音閑	音閑	

(22) 見 jiàn

『廣韻』去三十二霰・見(古電切)「視也，…」見(胡甸切)「露也」。二音の韻母は同じだが、「みる」だと見母、「あらわれる」だと匣母で、それぞれ現代語の jiàn と xiàn に對應する。『羣經音辨』卷六・辨彼此異音に「見，上臨下曰見(古甸切)，下朝上曰見(胡甸切)」見，視之曰見(古甸切)，示之曰見(胡甸切)も同じ読み分けについて異なる観点から述べているものである。つまり、「上臨下曰見(古甸切)，下朝上曰見(胡甸切)」というのは、目上の者が目下の者に会うときは「みる」「まみえる」という表現でよいが、目下の者が目上の者に会うときは下の者が上の者を「みる」のは礼を失するので目上の者の前に目下の者が「あらわれる」という表現をするという發想である。この二音の違いは聲調にあるのではなく聲母にあるので、二十卷本、『集注』も『釋文』と同じく「賢遍反(賢徧反)」という反切が用いられるが、八卷本、『章句』は直音が用いられる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
小雅・角弓	始見	如字，下文同	×	×
周頌・載見	載見	賢遍反，下並同	賢遍反，下同	音現
八佾	請見	賢遍反	賢遍反	
八佾	(見之)	×	賢遍反	
述而	童子見	賢徧反	賢遍反	
泰伯	則見	賢徧反，又音現	賢遍反	
顏淵	吾見	賢遍反	賢徧反	
衛靈公	見	賢遍反	賢遍反	
衛靈公	冕見	賢遍反	賢遍反	
季氏	見於	賢遍反	賢遍反	
微子	見其	賢遍反	賢遍反	
中庸 6	莫見	賢遍反，注顯見同，一音如字	音現	
中庸 121	見乎	賢遍反，下不見，注著見同，一本乎作於	音現	
中庸 126	不見而章	×	音現	
中庸 172	見而	賢遍反	音現	

(23) 將 jiāng

『廣韻』下平十陽・將(即良切)に「送也，行也，大也，助也，辭也，又姓，……即良切，又子諒切」，去四十一漾・醬(子亮切)小韻に「將，將帥」。『羣經音辨』卷二・辨字音同異に「將，領也(子良切)，將帥，也(子匠切)，將，請也(七羊切，詩將仲子⁴⁵⁾)，將，牝羊也(音牂，

45) 鄭風

禮取羊若將⁴⁶⁾), 將, 雜也 (音陽, 禮伯用將⁴⁷⁾, 鄭衆讀又如字), 卷六・辨字音清濁に「將持也 (即良切), 持衆者曰將 (即亮切)。「大將」「將帥」「將校」などの「將」は「子亮切」, 「請う」「願う」の意の「將」は「七羊切」で, その他の常用義は「即良切」である。現代語では「七羊切」に對應する音はなく, jiāng, jiàng の読み分けは『廣韻』などと同じである。『釋文』では常用義以外の二義について反切で音を示し, 二十卷本も反切を用いるが, 八卷本は直音で音を示す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
召南・鵲巢	將之	如字, …, 沈七羊反	×	×
衛・氓	將子	七羊反	七羊反	音槍
王・丘中有麻	將其	王申毛如字, 鄭七良反, 下同	七羊反	音槍
鄭・將仲子	將仲子	七羊反, …, 下及注皆同	七羊反	音槍
鄭・大叔于田	將叔	七羊反	七羊反	音槍
鄭・有女同車	將將	七羊反	七羊反	音鏘
秦・終南	將將	七羊反	七羊反	音鎗
小雅・庭燎	將將	七羊反, 本或作鏘	七羊反	音槍
小雅・正月	將伯	七羊反	七羊反	音槍
小雅・鼓鍾	將將	七羊反	七羊反	音槍
小雅・漸漸之石	將率	子亮反, …, 注及後篇將率放此	(詩序釋文)	(詩序釋文)
大雅・緜	將將	七羊反	七羊反	音槍
大雅・烝民	將將	七羊反, 本亦作鏘同	七羊反	×
大雅・韓奕	將將	七羊反, 本亦作鏘	×	×
周頌・我將	我將	如字	×	×
周頌・執競	將將	七羊反	七羊反	音槍
魯頌・閟宮	將將	七羊反	七羊反	音槍

(24) 降 jiàng

『廣韻』上平四江・絳 (下江切) 小韻に「降, 降伏, 又古巷切), 去四絳 (古巷切) に「降, 下也, 歸也, 落也, 又音缸, 伏也」。『羣經音辨』卷六・辨彼此異音に「下謂之降 (古巷切), 伏謂之降 (戸江切)」。現代語でも「落下」の意味の「降」は jiàng, 「投降」の意の「降」は xiáng である。『釋文』では「投降」「降伏」の「降」に反切が附く。二十卷本も音が附く箇所は反切を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
召南・草蟲	則降	戸江反	戸江反, 叶乎攻反	音杭, 叶乎攻反
小雅・出車	則降	戸江反, 又如字, 注下皆同	戸江反, 叶胡攻反	音杭, 叶胡攻反
大雅・旱麓	攸降	如字, …, 又戸江反	叶呼攻反	叶呼攻反
大雅・鳧鷖	攸降	戸江反	叶乎攻反	叶乎攻反

(25) 近 jìn

『廣韻』上十九隱・近 (其謹切) に「迫也, 幾也), 去二十四焮・近 (巨靳切) に「附也」, 『羣經音辨』卷六・辨字音疑混に「近, 相隣曰近 (巨隱切), 相親曰近 (巨刃切)。「近い」なら上聲, 「近づく」なら去聲ということである。いずれも濁音 (群母) で, 上聲, 去聲いずれも現代語では

46) 『禮記』内則「取豚若將」, 『釋文』「依注音牂, 子郎反」。

47) 『周禮』冬官考工記・玉人, 鄭注「鄭司農云, …龍、瓚、將, 皆雜名也」, 釋文「司農音讓將如字」。

第四聲になるためか、現代語では jin 一音のみである。『釋文』は「近づく」の意の去聲の「近」に「附近之近」という注が付くが、『集注』、『章句』では聲調で音が示される。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
大雅・民勞	以近	附近之近	×	×
大雅・蕩	近喪	附近之近, 又如字	×	×
大雅・崧高	往近	音記, 毛已也, 鄭辭也	鄭音記, 按說文從 彡從斤, 今從斤誤	×
學而	信近	附近之近, 下及注同, 又如字	去聲	
泰伯	斯近	附近之近	去聲	
陽貨	近	附近之近	去聲	
中庸 97	近乎	附近之近, 下同	去聲	
中庸 159	近之	如字, 又附近之近	×	
大學 2	則近	附近之近	×	

(26) 勞 láo

『廣韻』下平六豪・勞（魯刀切）に「倦也，勤也，病也，又姓，……」，去三十七号・嫪（郎到切）小韻に「勞，勞慰，又郎刀切」。『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「勞，勤也（力刀切），賞勸勸功曰勞（力到切）」。現代語は láo 一音だが、『廣韻』、『羣經音辨』では「勞働」「疲勞」の「勞」は平聲、「慰勞」の「勞」は去聲である。『釋文』、二十卷本は去聲の「勞」に反切で音を附けるが、八卷本は聲調で音を示す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
魏・碩鼠	肯勞	如字, 又力報反	×	×
曹・下泉	勞之	力報反	力報反	去聲
小雅・黍苗	勞之	力報反	力報反	去聲
大雅・旱麓	所勞	力報反	力報反	去聲
子路	勞之	孔如字, 鄭力報反	如字	
憲問	勿勞	力報反	×	

(27) 樂 lè

『羣經音辨』卷二・辨字同音異に「樂，五聲八音總名也（五角切），樂，悅也（盧各切），樂，欲也（五教切），樂，治也（音療，詩泌之洋洋可以樂飢⁴⁸⁾」，卷六・辨彼此異音に「聲和爲樂（五角切），志和爲樂（力各切）」，『廣韻』去三十六效・樂（五教切）「好也，…，又岳，洛二音」，入四覺・嶽（五角切）小韻に「樂，音樂，又姓」，入十九鐸・落（盧各切）小韻に「樂，喜樂，又五角，五教二切」。いずれも、「音樂」の「樂」は疑母覺韻，「このむ、ねがう」の意の「樂」は疑母效韻，「たのしい」の意の「樂」は來母鐸韻である。現代語は「音樂」の「樂」は yuè，「たのしい」「たのしむ」の lè の二音のみで，中古音の疑母效韻に對應する音はない。『釋文』では「音樂」の「樂」が「如字」で，「たのしい」には「音洛」，「このむ」には「五孝反」「五教反」な

48) 陳風・衡門

どの音が附され、『詩集傳』『集注』『章句』も概ねそれらを襲用する。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
周南・關雎	樂之	音洛，又音岳，或云協韻宜五教反	音洛	音洛
周南・樛木	樂樂	×（箋釋文に「音洛」）	音洛	音洛
王・君子陽陽	其樂	音洛	音洛	音洛
鄭・出其東門	聊樂	音洛，注並同，一音岳，…	音洛	音洛
鄭・漆洧	且樂	音洛，注下同	音洛	音洛
魏・碩鼠	樂	音洛，注下同	音洛，下同	音洛，下同
唐・蟋蟀	虞樂	音洛，下皆同	音洛，下同	音洛，下同
唐・山有樞	自樂	音洛，下及注同	音洛	音洛
唐・揚之水	不樂	音洛	音洛	音洛
秦・車鄰	安樂	音洛，下文並同	音洛	音洛
秦・晨風	靡樂	音洛	音洛	音洛
陳・衡門	以樂	本又作爨，毛音洛，鄭力召反，沈云舊皆作樂字，…	音洛	音洛
檜・隰有萋楚	樂子	音洛，注下皆同	音洛	音洛
小雅・鹿鳴	和樂	音洛	音洛	音洛
小雅・常棣	和樂	音洛，下皆同	音洛	音洛
小雅・南有嘉魚	樂以	音洛，協句五教反	五教、歷各二反	音洛叶五教反
小雅・南山有臺	樂	×（箋「樂」に音注あり）	音洛	音洛
小雅・菁菁	喜樂	音洛	音洛	音洛
小雅・鶴鳴	樂彼	音洛，沈又五孝反，注及下同	音洛	音洛
小雅・正月	克樂	音洛	音洛	音洛
小雅・谷風	將樂	音洛，注下皆同	音洛	音洛
小雅・北山	樂	音洛	×	×
小雅・桑扈	其樂	×	音洛	音洛
小雅・頍弁	樂酒	音洛	×	×
小雅・頍弁	樂	×	音洛	圈點入声
小雅・賓之初筵	樂	×	音洛	音洛
小雅・魚藻	自樂	音洛，篇内，唯注八音之樂一字，音岳，餘並同	（詩序釋文）	（詩序釋文）
小雅・魚藻	樂	×（詩序「自樂」に音あり）	音洛	音洛
小雅・采芣	樂只	音洛	×	音洛
小雅・隰桑	其樂	音洛，注下皆同	音洛	音洛
大雅・靈臺	喜樂	音洛，下文於樂，注喜樂皆同（箋釋文）	（箋釋文）	（箋釋文）
大雅・靈臺	樂	×（箋釋文に音あり）	音洛	音洛
大雅・假樂	樂	×	音洛	音洛
大雅・抑	樂於	音洛，下文及注同	音洛	音洛
大雅・抑	靡樂	音洛	音洛	音洛
大雅・韓奕	韓樂	音洛	音洛，叶力告反	音洛，叶力告反
魯頌・有駟	樂兮	音洛，注喜樂，下于胥樂兮及注安樂同	音洛	音洛
魯頌・泮水	樂	×	音洛	音洛
學而	亦樂	音洛	音洛	
學而	而樂	音洛	音洛	
八佾		×	音洛	
里仁	處樂	音洛	音洛	
雍也	其樂	音洛	音洛	
雍也	樂之	音洛	音洛	
雍也	樂	音岳，又五孝反，注及下同	五孝反	
雍也	知者樂	五孝反，下同	五孝反	
雍也		×（上文「知者樂」釋文に「下同」）	音洛	

述而		(並) 如字	×
述而	樂亦	音洛, 注同	音洛
述而	樂以	音洛	×
先進	子樂	音洛	音洛
子路	無樂	音洛	音洛
憲問	樂然	音洛	×
季氏	三樂	五教反, 下不出者同	五教反
季氏	禮樂	音岳	音岳
季氏	驕樂	音洛, 下宴樂同	音洛
陽貨	聞樂	×	(上) 如字
陽貨	不樂	音洛	(下) 音洛
微子	女樂	(並) 如字	×
中庸 7	哀樂	音洛, 注同	音洛
中庸 58	和樂	音洛, 下及注同	音洛
大學 34	樂其樂	並音岳, 又音洛, 注同	音洛
大學 52	樂	徐五孝反, 一音岳	去聲
大學 79	樂只	×	音洛

(28) 離 lí

『廣韻』上平五支・離(呂支切)に「近曰離, 遠曰別, …」, 去五寘・罍(力智切)小韻に「離, 去也, 又力知切」, 去十二霽・麗(郎計切)小韻に「離, 漢書⁴⁹⁾云, 附離, 著也」, 『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「離, 兩也(力支切), 兩之曰離(力智切)」。離れている状態をいうときは平聲, 離す, 分かつという意味では去聲である。『釋文』では平聲が「如字」で, 去聲の「離」に反切が附く。『章句』は一例のみだが聲調で音を示す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
邶・旄丘	離	如字	×	×
王・黍離	離	如字, 說文作稿	×	×
中庸 2	離也	力智反, 下及注同	去聲	

(29) 量 liáng

『廣韻』下平十陽・良(呂張切)小韻に「量, 量度」, 去四十一漾・亮(力讓切)小韻に「量, 合斛斗」, 『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「量, 酌也(龍張切), 酌之有大小曰量(龍向切)」。いずれも現代語と同じく, 「はかる」の意なら平聲(liáng), 「ます」「容積」「数量」などの意なら去聲(liàng)だとする。『釋文』は去聲の「量」に直音で音を記し, 『集注』は聲調で音を記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
鄉黨	無量	音亮	去聲	
子張	不知量	音亮	去聲	
堯曰	權量	音亮	×	

49) 楊雄傳下「附離」顏師古注に「離, 著也, 音麗」。

(30) 令 ling

『廣韻』下平二仙・連（力延切）小韻に「令，漢書云，金城郡有令居縣，顏師古又音零」，下平十四清・鈴（呂貞切）小韻に「令，使也，又呂郃，郎丁二切」，下平十五青・靈（郎丁切）に「令，漢複姓有令狐氏，……」，去四十五勁・令（力政切）に「善也，命也，律也，法也，力政切，又力盈切，又歷丁切」，去四十六徑・零（魯丁切）小韻に「令，令支縣在遼西郡」。『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「令，使也（力丁切），所使之言謂之令（力政切）。『釋文』では，「告也」「命也」「善也」などと訓じられる「令」に去聲，使役の意の「令」平声の反切が付き，同じ平聲でも「脊令」などの「鴿」に通じる「令」には直音注が附く。二十卷本は『釋文』と同じだが，八卷本は反切を聲調に置き換える。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
齊・東方未明	令之 ⁵⁰⁾	力證反	力證反，叶力呈反	去聲，叶力呈反
齊・盧令	盧令	音零，下同	音零	音零
秦・車鄰	之令 ⁵¹⁾	力呈反，…，又力政反，沈力丁反	力呈反	平聲
小雅・常棣	令	音零，本亦作鴿同	音零	音零
小雅・小宛	脊令	音零，本亦作鴿	音零	音零
大雅・韓奕	令居	力呈反，使也，又力政反，命也，王力政反，善也	×	×

(31) 難 nán

『廣韻』上平二十五寒・難（那干切）に「艱也，不易稱也，…」去二十八翰・攤（奴案切）小韻に「難，患也」，『羣經音辨』卷二・辨字同音異・隹部に「難，艱也（奴干切），難，郤也（乃多切，禮季冬始難毆疫⁵²⁾）」，卷六・辨字音清濁に「難，艱也（乃干切），動而有所艱曰難（乃旦切）」。いずれも現代語と同じく，「難易」の「難」が平聲（nán），「災難」「非難」の「難」が去聲（nàn）である。『羣經音辨』はそのほかに「儼^{おにやらい}（nuó）」に通じる「難」を載せる。『釋文』では去聲の「難」に「乃旦反」という反切を付け，二十卷本も反切を用いるが，八卷本、『集注』、『章句』は聲調で音を示す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
小雅・常棣	急難	如字，又乃旦反	叶泥治反	叶泥治反
小雅・出車	多難	乃旦反，注及下皆同	乃旦反	去聲
小雅・隰桑	有難	乃多反，盛貌	乃多反	音那
周頌・訪落	多難	如字，協韻乃旦反	乃旦反	去聲
周頌・小毖	多難	×	乃旦反	去聲
憲問	怨難	乃旦反	×	
憲問	末之難	如字，或乃旦反	×	
季氏	思難	乃旦反	去聲	
中庸 45	患難	乃旦反，下同	去聲	

50) 毛傳「令，告也」

51) 經文「未見君子，寺人之令」鄭箋「欲見國君者必先令寺人使傳告之」。

52) 『周禮』夏官・方相氏

(32) 妻 qī

『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「妻，与夫齐者也（七奚切），以女適夫曰妻（七計切，論語以其子妻之⁵³⁾）。『廣韻』も同じく，上平十二齊・妻（七稽切）に「齊也」，去十二霽・砌（七計切）に「妻，以女妻人」。「妻^{つま}」は平聲，「妻^めあわす」は去聲である。『新華字典』も qī のほかに，古代の用法として「以女嫁人」という意味の qì という音を載せる。『釋文』は去聲の「妻」に反切を附け，『集注』はそれを聲調に置き換える。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
公冶長	可妻	七細反，下同	去聲，下同
先進	妻之	七細反	去聲

(33) 強 qiáng

『廣韻』は下平十陽の「強」（巨良切）一音のみ。『集韻』では平聲の他，上三十六養に「強，巨兩切，勉也」。「強^{つよ}い」の意なら平聲，「強^しいる」という意なら上聲である。『釋文』は反切で音を示すが，『中庸章句』では上聲の「強」にのみ聲調で音を示している。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
中庸 27	問強	其良反，下同	×
中庸 95	勉強	其兩反，注同	上聲
中庸 117	必強	其良反	×

(34) 取 qù

『廣韻』上九麌・取（七庾切）に「收也，受也」，上四十五厚・趣（倉苟切）小韻に「取，又七庾切」，また去十遇・娶（七句切）に「說文曰，取婦也」。『羣經音辨』卷一・辨字同音異に「取，求也（七庾切），取，納女也（音娶，禮取於異姓），取慮，縣也（七由切，杜預曰，下邳有取慮縣⁵⁴⁾）」，卷六・辨彼此異音に「制師從己曰取（七與切，禮曰，禮不聞取人⁵⁵⁾），屈己事師曰取（七句切，禮曰，禮聞取於人⁵⁶⁾）。『釋文』では「娶」に讀む「取」に「七喻反」という反切または意味を表す直音注「音娶」が付き，二十卷本も同じだが，八卷本は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
齊・南山	取妻	七喻反，注下皆同	七喻反	去聲
陳・衡門	取妻	音娶	音娶	音娶
豳・伐柯	取妻	七喻反，本亦作娶	七喻反	去聲
小雅・角弓	孔取	如字，沈又音娶	叶音娶	叶音娶
大雅・韓奕	取妻	七喻反，本亦作娶	七住反	去聲

53) 公冶長

54) 『左傳』昭公十六年傳注

55) 『禮記』曲禮上「禮聞取於人，不聞取人」釋文「取於人，舊七樹反，謂趣就師求道也，皇如字，謂取師之道，取人，如字，謂制師使從己」。

56) 上注参照。

(35) 去 qù

『羣經音辨』卷六・辨彼此異音に「除之曰去（羌舉切），自離曰去（丘⁵⁷ 倨切）」、『廣韻』上八語・去（羌舉切）に「除也，…」，去九御・坎（近⁵⁸ 倨切）小韻に「去，離也」。「除去する」「除く」という意味だと上聲，「去る」「立ち去る」の意味だと去聲ということになる。現代語は qù 一音である。『釋文』では「除く」という意味の「去」に反切が付き，二十卷本も同じだが，『集注』では初出箇所を除いて，それを聲調で記しているし，八卷本、『章句』も一箇所のみだが聲調で記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
小雅・大田	去其	起吕反	起吕反	上聲
八佾	欲去	起吕反	起吕反	
鄉黨	去喪	起吕反	上聲	
顔淵	而去	起吕反，下同	上聲，下同	
子路	去殺	×	上聲	
中庸 102	去讒	起吕反	上聲	

(36) 三 sān

『廣韻』下平二十三談・三（蘇甘切）に「數名，…」，去五十四闕・三（蘇暫切）に「三思」，『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「三，奇數也（蘇甘切），審用其數曰三（蘇暫切，論語三思而後行⁵⁹）」。「數の「三」は平聲，「再三」、「何度も」という意味で用いられる「三思」などの「三」は去聲である。現代語ではいずれも sān である。『釋文』は去聲の「三」を「息暫反」とするが，すべて「又如字」とする。『詩集傳』は「三」に音注はなく，『集注』は聲調で音を注する。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
小雅・采薇	三捷	息暫反，又如字	×	×
學而	三	息暫反，又如字	×	
公冶長	三思	息暫反，又如字	去聲	
鄉黨	三	息暫反，又如字	×	
先進	三復	息暫反，又如字	去聲	
微子	三	息暫反，又如字	去聲	

(37) 喪 sāng

『廣韻』下平十一唐・桑（息郎切）小韻に「喪，亡也，死喪也，…又息浪切」，去四十二宕・喪（蘇浪切）「亡也，…，又音桑」，『羣經音辨』卷六に「喪，死亡曰喪（息郎切），失亡曰喪（息浪切）」。現代語と同じく，「喪禮」に関わる「喪」が平聲（sāng），「失う」の意の「喪」が去聲（sàng）。『釋

57) 四部叢刊續編本は「丘」を「兵」に作る。水谷誠『群經音辨索引』によると畿輔本は「丘に作るという。ここではそれに従って改めた。

58) 周祖謨校本は「近」を誤字とする。

59) 公冶長

文』では「失う」の意の去聲の「喪」に反切が付き、二十卷本も概ね反切を用いるが、八卷本、『集注』、『章句』は聲調を記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
邶・擊鼓	爰喪	息浪反	息浪反	息浪反
小雅・節南山	喪	×	息浪反	去聲
小雅・雨無正	喪	×	息浪反	去聲
小雅・頰弁	死喪	息浪反	去聲	去聲
大雅・文王	未喪	息浪反	息浪反	去聲
大雅・皇矣	喪	×	息浪反, 叶平聲	去聲, 叶平聲
大雅・板	喪	×	息浪反	去聲
大雅・蕩	喪	×	息浪反, 呼平聲	去聲, 叶下聲
大雅・抑	曰喪	息浪反	息浪反	×
大雅・桑柔	喪	×	息浪反	去聲
大雅・雲漢	喪	×	息浪反	去聲
大雅・召旻	喪	×	息浪反, 叶桑郎反	去聲, 叶桑郎反
八佾	於喪	息浪反	去聲	
子罕	將喪	息浪反	去聲	
先進	天喪	如字, …, 舊息浪反	去聲	
子路	而喪	息浪反	去聲, 下同	
憲問	不喪	息浪反, …, 又如字	去聲	
大學 87	未喪	息浪反	去聲	

(38) 上 shàng

『廣韻』上三十六養・上（時掌切）に「登也，升也，…，又音尚」，去四十一漾・尚（時亮切）小韻に「上，君也，猶天子也，又時兩切」，『羣經音辨』卷六・辨字音疑混に「上，居高定體曰上（時亮切），自下而升曰上（時掌切）」。「上」^{うえ}「天子」などの意なら去聲，「のぼる」「あがる」なら上聲である。現代語では，濁音（禪母）で上聲と去聲がどちらも第四聲になるためか，shàng一音のみである。『釋文』では上聲に反切が附く。二十卷本も反切を用いるが，八卷本は二箇所のうち一箇所は聲調，『集注』は一箇所のみだが聲調で音を示す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
邶・燕燕	而上	時掌反, 篇内皆同	時掌反	上聲
邶・雄雉	下上	時掌反	時掌反	時掌反
鄭・大叔于田	上襄	如字	×	×
陳・宛丘	上	×	辰羊, 辰亮二反	×
豳・七月	上入	時掌反	×	×
雍也	以上	時掌反	上聲	
述而	以上	時掌反, 注同	×	
鄉黨	上	時掌反, 又如字	×	

(39) 少 shǎo

『廣韻』上三十小・少（書沼切）に「不多也，…，又式照切」，去聲三十五笑・少（失照切）に「幼少，…，又失沼切」，『羣經音辨』卷六に「少，凡微曰少（施沼切），其降曰少（施照切）」。現代語での shǎo と shào の読み分けと同じく，上聲が「少ない」，去聲が「少い」^{わか}である。『釋文』

では「少^{わか}い」の「少」に反切が付き、『集注』は聲調を記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
公冶長	少者	詩照反	×
子罕	吾少	詩照反, 下同	×
子罕	少	×(上文「吾少」釋文に「詩照反, 下同」)	去聲
季氏	少之	詩照反	×
微子	少連	詩照反, 下同	去聲, 下同
微子	少師	詩照反	去聲

(40) 舍 shě

『廣韻』上三十五馬・捨(書治切)の下に「舍, 止息, 亦上⁶⁰⁾同, 亦音赦, 去四十禡・舍(始夜切)に「屋也, …」, 『羣經音辨』卷二・辨字同音異に「舍, 居也(始夜切), 舍, 放也(音捨, 鄭康成說禮施舍, 謂不給繇役也⁶¹⁾), 舍, 置也(音釋, 禮春入學舍菜⁶²⁾)」。建物の意や「舍る」の意では去聲, 「捨」に通じる「舍」は上聲, 「釋菜」の「釋」に通じる「舍」は入聲である。現代語でも「捨てる」という意味なら shě, 「宿舍」などの「舍」なら shè という読み分けがある。『釋文』論語音義は「居」「屋」などと訓じられる「舍」には「音赦」(『論語音義』一箇所のみ「如字」), 「捨」に通じる「舍」には「音捨」といづれも直音で記し, 『詩集傳』もそれを襲用するが, 『集注』は聲調で記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
鄭・羔裘	舍命 ⁶³⁾	音赦, …, 沈書者反	音赦	音赦
唐・采芑	舍	音捨, 下同	音捨, 下同	音捨
秦・駟驥	舍	音捨	音捨	音捨
小雅・車攻	舍矢	音捨	音捨	音捨
小雅・雨無正	舍彼	音赦, …, 一音捨	音赦	音赦
小雅・小弁	舍彼	音捨, …, 又音赦	音捨	音捨
小雅・賓之初筵	舍	音捨	音捨	音捨
大雅・行葦	舍矢	音捨	音捨	圈点上声
大雅・瞻卬	舍爾	音捨	音捨	音捨
雍也	其舍	音捨, …, 棄也, 一音赦, 置也	上聲	
述而	舍之	音赦, …, 一音捨, …	上聲	
子罕	不舍	音捨	上聲	
先進	舍瑟	音捨	上聲	
子路	其舍	如字	上聲	
季氏	舍曰	音捨	上聲	

60) 「上」は「捨」。

61) 『周禮』地官・鄉師「施舍」注。

62) 『周禮』春官・大胥。

63) 鄭箋「舍猶處也」

(41) 射 shè

『廣韻』去四十禡・夜（羊謝切）小韻に「射，僕射」，射（神夜切）に「射弓也，周禮有五射，……又姓，……神夜切，又音石，又音夜，僕射也」，入二十二昔・釋（羊益切）小韻に「射，無射，九月律」，麝（食夜切）小韻に「射，世本曰逢蒙作射，又姓，……，又神柘切，又羊謝、羊益二切」。『羣經音辨』卷二・辨字同音異に「射，發弓弩矢也（神夜切），射，指的命中也（神亦切），無射，律也（音亦，禮季秋之月，律中無射），僕射，官也（音夜，古者尚武，故以射命官，後語轉為此音）」，卷六・辨彼此異音に「命中曰射（神亦切，易射隼于高墉之上），以禮曰射（神夜切，大射鄉射，是也）」。それらによれば，常用義の「射る」なら「神夜切」，的を射当てるといふ意の「射てる」なら「神亦切」，律名の「無射」なら「羊益切」（「音亦」），官名の「僕射」なら「羊謝切」（「音夜」）である。『釋文』は「射てる」の意なら「食亦反」，「無射」なら「音亦」とする。『詩集傳』，『集注』，『章句』も，八卷本が一部「食亦反」を「音石」と直音に置き換えているのを除けば『釋文』と同じ注音法を用いている。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
齊・猗嗟	射侯	食亦反	食亦反	音石
小雅・車牽	無射	音亦，…，下同	音亦，叶都故反	音亦，叶都故反
大雅・思齊	無射	毛音亦，…，鄭食夜反，…	音亦	音亦
大雅・抑	射思	音亦	音亦，叶弋灼反	音弋，叶弋灼反
周頌・清廟	無射	音亦	音亦與敦同	音亦
述而	不射	食亦反	食亦反	
中庸 66	可射	音亦，厭也	音亦，詩作敦	
中庸 162	無射	音亦，注同	音亦，詩作敦	

(42) 勝 shēng

『廣韻』下平十六蒸・升（識蒸切）小韻に「勝，任也，舉也，…」，去四十七證・勝（詩證切）に「勝負，又加也，克也，…」，『羣經音辨』卷六に「勝，舉也（識蒸切），舉之克曰勝（詩證切）」。「たえる」「あげる」の意なら平聲，「かつ」「まさる」の意なら去聲である。現代語ではいずれも shēng だが，『新華字典』には「能担任」「能承受」の意味で用いられる場合の又音として shèng が記載されている。『釋文』では平聲の「勝」が「音升」とされ，『詩集傳』もそれを襲用するが，『集注』は聲調で記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
小雅・正月	弗勝	毛音升，…，鄭尸證反	音升	音升
大雅・緜	弗勝	音升	音升	圈点平声
商頌・玄鳥	不勝	毛音升，…，鄭式證反	音升	音升
鄉黨	不勝	音升	平聲	
子路	勝殘	音升	去聲	

(43) 省 shěng

『廣韻』上三十八梗・省（所景切）に「省署，漢書曰，舊名，禁中避元后諱，改爲省中，…，

又息井切], 上四十靜・省(息井切)に「察也, 審也」, 『羣經音辨』卷二・辨字同音異に「省, 減也(所景切), 省, 視也(昔井切)」。いずれも現代語で, 「省く」の意の「省」を shěng, 「省みる」の意の「省」を xǐng と發音するのと同じ読み分けである。『釋文』は「省みる」方の「省」に反切を附すが, 二十卷本, 『集注』も同じである。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
大雅・皇矣	省	昔井反	息井反 ×
學而	省	悉井反	悉井反
里仁	省	×	悉井反

(44) 施 shī

『廣韻』上平五支・纏(式支切)に「施, 施設, …, 又式豉, 以寘二切」, 去五寘・翅(施智切)に「施, 易曰, 雲行雨施⁶⁴⁾, 又式支切」。『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「施, 行也(式支切), 行惠曰施(式豉切)」, 辨彼此異音に「施, 設之曰施(式支切, 詩肅肅兔置, 施于中逵⁶⁵⁾), 及之曰施(羊至切, 詩葛之覃兮, 施于中谷⁶⁶⁾)」。『廣韻』『羣經音辨』によれば, 「しく」「設ける」という意味なら「式支切」(書母支韻, 平聲), 「ほどこす」「めぐむ」という意味なら「施智(式豉)切」(書母寘韻, 去聲), 「およぶ」という意味なら「羊至切」(喻母(四等)至韻(『廣韻』は寘韻), 去聲)ということになる。「式豉切」も「羊至切」も去聲だが, 「式支切」と「施智(式豉)切」の違いは聲調に存するためか, 『集注』『章句』では聲調で音を記している。八卷本は直音で音を記す。なお, 現代語は shī 一音のみである。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
周南・葛覃	施于	毛以豉反, …, 鄭如字, 下同	以豉反 音異
周南・菟置	施于	如字	×
周南・菟置	施于中林	如字, 沈以豉反	×
王・丘中有麻	施施	如字	叶時遮反 叶蛇
豳・東山	亦施	以豉反	以豉反 音異
小雅・頍弁	施于	以豉反, 下同	以豉反 音異
大雅・旱麓	施于	以豉反	以豉反 音異
大雅・皇矣	施于	以豉反	以豉反 音異
雍也	博施	始豉反	去聲
中庸 174	施及	以豉反	去聲
大學 91	施奪	如字	×

(45) 食 shí

『廣韻』去七志・異(羊吏切)に「食, 人名, 漢有酈食其, 又音蝕」, 入二十四職・食(乘力切)

64) 乾・象傳

65) 周南・兔置

66) 周南・葛覃

「飲食、…」、『羣經音辨』卷六・辨彼此異音に「餐謂之食（時力切，凡食物也），餉謂之食（音寺）。『廣韻』は人名に用いられる「食^い」しか異音を載せないが、『集韻』去七志・寺（祥吏切）小韻の「飢，說文糧也」の異體字として「食」を載せ、『增韻』も「以食食人」と釋される「飢」（祥吏切）の下に「食，同上，…」とする。「飢」は「飼」の異體字で、『廣韻』『集韻』の釋義からもわかるように、「食べさせる」、「糧」などの意味がある。『羣經音辨』は常用音の入聲で讀まれる「食」は「餐（たべもの）」の意，去聲で讀まれる「食」は「餉（食物をおくる）」の意だとする。「音寺（祥吏切）」で讀まれる「食」は「飼」に讀むべきなのかもしれない。『釋文』論語音義では、「食べさせる」のほか、「疏食」の「食」などにも「音嗣」が附けられている。『詩集傳』、『集注』も聲調ではなく『釋文』の「音嗣」を襲用する。現代語では通常は shí と讀むが、「人にものを食べさせる」という意味の時のみ sì と發音する。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
王・丘中有麻	來食	如字，一云，鄭音嗣	×	×
唐・有杕之杜	食之	音嗣，下同	音嗣	音嗣
秦・權輿	以食我	音嗣，注篇内同	×	×
豳・七月	食我	音嗣	音嗣	音嗣
小雅・甫田	食我	音嗣	音嗣	音嗣
小雅・角弓	如食	音嗣	音嗣	音嗣
小雅・縣蠻	飲食	音嗣，篇内皆同（詩序釋文）	音嗣	音嗣
大雅・公劉	食之	音嗣	音嗣	音嗣
爲政	食	音嗣	音嗣	
雍也	食	音嗣	音嗣	
述而	食	如字，…，一音嗣，…	音嗣	
鄉黨	食不	音嗣	音嗣	
鄉黨	食	×	音嗣	
鄉黨	食氣	如字	音嗣	
鄉黨	疏食	音嗣，又如字	音嗣	
憲問	食	如字，又音嗣	×	
陽貨	食夫	音嗣	×	
微子	而食	音嗣	音嗣	

(46) 使 shǐ

『廣韻』上六止・史（疎士切）「使，役也，令也」，去七志・駛（疎吏切）「使」義注なし。『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「使，命也（疎士切），將命者曰使（疏事切）。『廣韻』『羣經音辨』によると、「使う」、「使役する」という意味なら上聲、「使い」「使者」という意味なら去聲だということになるが、『釋文』ではその他「使いする」という意味の動詞にも去聲の「所吏反」という反切が附く。『集注』は反切でなく聲調を用いる。現代語では「使節」「大使」などの「使」でも shǐ と發音する。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音
雍也	使於	所吏反	去聲
子路	使於	所吏反	去聲
子路	使於	所吏反	去聲

憲問	使者	所吏反, 下及注同	去聲, 下同
----	----	-----------	--------

(47) 説 shuō

『廣韻』去十三祭・稅（舒芮切）小韻に「説，説誘」，入十七薛・悅（弋雪切）小韻に「説，姓，…，又失莢、始銳二切」，説（失莢切）に「告也，釋名曰，説者述也，宣述人意也，又悅稅二音」。『廣韻』には，日本漢字音でも區別される「遊説」などの「説」，「不亦説乎」の「説」，常用の「説く」という場合の「説」に對應する三音が載っており，現代語にもそれに對應する shuì, yuè, shuō の發音がある。『羣經音辨』卷一・辨字同音異に「説，釋也（失拙切），説，怡也（音悅），説，舍也（音稅），説，解也（吐活切，易用説桎梏⁶⁷⁾），説，悅也（如銳切，禮，國君過市，則刑人赦，鄭康成曰，市者人之所交利而行刑之處，君子無故不游觀焉，若游觀，則施惠以為説也⁶⁸⁾，又如字）。『羣經音辨』には三音のほか，『周易』などに見える「脱」に通じる音と『釋文』では周禮音義の地官・司市「爲説」の「説」にのみ見える「如銳切」を挙げる。『釋文』では「悅」に通じる「説」に「音悅」，「舍^{やど}る」の意の「説」に「音稅」（一箇所「始銳反」という音を附け，『詩集傳』、『集注』いずれもそれを踏襲している。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
召南・草蟲	則説	音悅	音悅	音悅
召南・甘棠	説其 ⁶⁹⁾	本或作稅，又作脱同，始銳反	始銳反	音稅
邶・擊鼓	成説	音悅	×	×
邶・靜女	可説 ⁷⁰⁾	本又作悅，毛王…音悅，…，鄭…音始悅反	音悅	音悅
鄘・定之方中	説于 ⁷¹⁾	毛始銳反，…，鄭如字，…	始銳反	音稅
衛・碩人	説于 ⁷²⁾	本或作稅，毛始稅反，…，鄭作稅，音遂，…	始銳反	音稅
陳・株林	説于 ⁷³⁾	音稅	音稅	音稅
曹・蜉蝣	歸説 ⁷⁴⁾	音稅，…，協韻如字	音稅，叶輪蕪反	音稅，叶輪蕪反
小雅・頍弁	説	音悅	音悅	音悅
小雅・都人士	不説	音悅	音悅	音悅
大雅・瞻卬	説之 ⁷⁵⁾	音稅，…，一音他活反	音脱	音脱
學而	亦説	音悅	説、悅同	
公冶長	子説	音悅	音悅	
雍也	不説	音悅	音悅	

67) 蒙

68) 『周禮』地官・司市

69) 毛傳「説，舍也」

70) 鄭箋は「説釋」について「當作説釋」とする。

71) 鄭箋「説于桑田，教民稼穡務農急也」

72) 鄭箋「説當作稅」

73) 鄭箋は「説」を「説舍」に置き換えて釋す。

74) 鄭箋「説猶舍息也」

75) 毛傳「説，赦也」

雍也	不説	音悦	音悦
子罕	無説	音悦	×
先進	不説	音悦	音悦
子路	者説	音悦	音悦
子路	難説	音悦	音悦
陽貨	不説	音悦	音悦
堯曰	則説	音悦	音悦
中庸 173	不説	音悦	音悦

(48) 孫 sūn

『廣韻』には「思渾切」（上平二十三魂）一音しか見えないが、『羣經音辨』卷五・辨字同音異は「孫, 子之子也（思門切）, 孫, 順也（音遜, 禮孫其業也⁷⁶⁾」と、「遜 (xùn)」に通じる「孫」の音を載せる。『釋文』も「遜」に通じる「孫」について直音で音を記す。『詩集傳』も同じだが、『集注』は聲調で記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
幽・狼跋	公孫	毛如字, …, 鄭音遜	音遜	音遜
大雅・文王有聲	孫謀	王申毛如字, …, 鄭音遜	×	×
述而	不孫	音遜	去聲	
憲問	言孫	音遜	去聲	
憲問	不孫	音遜	去聲	
衛靈公	孫以	音遜	去聲	
陽貨	不孫	音遜, 下同	去聲	
陽貨	(不孫)	×(上文「不孫」釋文に「音遜, 下同」)	去聲	

(49) 王 wáng

『廣韻』下平十陽・王（雨方切）に「大也, 君也, …, 又雨誑切」, 去四十一漾・迂（于放切）小韻に「王, 霸王, 又盛也, 又于方切」, 『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「王, 君也（于方切）, 君有天下曰王（于放切）」。君主の意の「王」は平聲, 「君臨する」という意味の「王たり」は去聲である。『釋文』は去聲の「王」に反切を付け, 二十卷本も反切を用いるが, 八卷本は聲調, 直音で, 『中庸章句』は聲調で音を記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
大雅・皇矣	王此	如字, …, 徐于況反	如字, 或于況反	如字, 去聲
大雅・下武	成王	如字, 又于況反	×	×
大雅・板	王	×	音往, 叶如字	音往, 叶如字
周頌・昊天有成命	成王	王如字, 徐于況反	×	×
周頌・噫嘻	成王	如字, 又于況反	×	×
商頌・玄鳥	武王	于況反, 又如字	×	×
子路	王者	于況反, 又如字	×(解釈は如字)	
中庸 80	追王	于況反, 注追王同	去聲	

76) 『禮記』學記。鄭注に「孫猶恭順也」。

中庸 155	王天下	于況反, 又如字	去聲
--------	-----	----------	----

(50) 爲 wéi

現代語でも「爲す」「する」という意味では wéi, 「爲に」という意味では wèi と発音するが、『廣韻』でも上平五支の「爲」(蓮支切, 去五寘「爲」の又切は尤危切)と去五寘の「爲」(于偽切, 上平五支「爲」の又切は王偽切)が載っているし、『羣經音辨』巻六にも「爲, 造也(委支切), 造而有所徇曰爲(于偽切)」とある。『釋文』では「如字」は平聲の方で, 「爲に」の方に反切が附く。二十卷本は『釋文』の反切を踏襲するが, 八卷本, 『集注』, 『章句』は聲調で音を記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
邶・靜女	之爲	于偽反, …, 或如字	×	×
鄘・相鼠	爲	×	叶吾禾反	叶吾何反
衛・伯兮	爲王	于偽反, 又如字, 注下爲王並同	于偽反	去聲
衛・伯兮	爲容	于偽反, 或如字	×	×
王・兔爰	爲	×	叶吾禾反	叶吾禾反
唐・采芣	爲言	于偽反, 或如字, 下文皆同, 本或作偽字非	×	×
豳・七月	曰爲	(下) 于偽反, 一讀…(下) 如字	×	×
大雅・鳧鷖	來爲	于偽反, …, 協句如字	叶吾禾反	叶胡禾反
大雅・抑	爲	×	叶吾禾反	叶吾禾反
大雅・雲漢	爲我	于偽反	于偽反	圈点去声
大雅・韓奕	爲韓	于偽反	于偽反	去聲
學而	爲人	于偽反, 又如字	去聲	
八佾	(爲力)	×	去聲	
八佾	爲兩	于偽反, 又如字	×	
雍也	爲其	于偽反	去聲	
雍也	善爲	于偽反	去聲	
述而	爲樂	(並) 如字, …, 本或作媿, 音居危反, 非	×	
述而	爲衛	于偽反	去聲	
述而	爲同	于偽反	×	
先進	之爲	于爲反	去聲	
先進	爲之	于偽反, 又如字	去聲	
子路	父爲	于偽反	去聲	
憲問	爲已	于偽反	去聲	
衛靈公	爲謀	于偽反	去聲	
中庸 84	為	×	去聲	

(51) 聞 wén

『廣韻』上平二十文(無分切)に「聞, 說文曰知聲也, 又音問, 去二十三問(亡運切)に「聞, 名達, 詩曰, 令聞令望⁷⁷⁾」。『羣經音辨』巻六に「聞, 聆聲也(亡分切), 聲著於外曰聞(亡運切,

77) 大雅・卷阿

詩聲聞于天⁷⁸⁾, 又曰令聞不已⁷⁹⁾)。常用義なら平聲, 「令聞」のように「名聲」の意で「聞こえ」と読む場合は去聲である。『釋文』は「令聞」「聲聞」など去聲で読む「聞」に「音問」と直音で音を附すが, 『詩集傳』もそれを襲用する。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
小雅・車攻	有聞	音問	音問	音問
小雅・鶴鳴	聲聞	音問	音問	音問
小雅・白華	聲聞	音問	音問	音問
大雅・文王	令聞	音問	音問	音問
大雅・卷阿	令聞	音問, 本亦作問	音問	音問
大雅・崧高	聞于	音問	音問	音問
大雅・江漢	令聞	音問	音問	圈点去声

(52) 下 xià

『廣韻』上三十五馬・下(胡雅切)に「賤也, 去也, 後也, 底也, 降也」, 去四十禡・暇(胡駕切)小韻に「下(行下, 又胡雅切)」。『羣經音辨』卷六・辨字音疑混に「居卑定體曰下(胡賈切), 自上而降曰下(胡嫁切)」。『羣經音辨』によると, 「下」^{した}「下」^{もと}など名詞なら上聲, 「下りる」^{おくだ}「下る」など動詞なら去聲のようで, 「上」と同様の読み分けがあるが, 「上」と同様, 濁音であるためか現代語では xià 一音のみである。『釋文』でも名詞の「下」に「如字」, 動詞に読む「下」に「遐嫁反」という去聲の反切を附す。二十卷本は『釋文』に同じ。八卷本と『集注』は反切でなく聲調で音を示す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
召南・采蘋	(牖)下	如字, 協韻則音戸, 後皆放此	叶後五反	叶後五反
小雅・角弓	肯下 ⁸⁰⁾	遐嫁反, …, 又如字	遐稼反	去聲
顔淵	以下	遐嫁反	去聲	

(53) 夏 xià

『廣韻』上三十五馬・下(胡雅切)小韻に「夏, 大也, 又諸夏, 亦州名, 秦屬上郡漢分」, 去四十禡・暇(胡駕切)小韻に「夏, 春夏, 又胡雅切)」。『羣經音辨』卷二・辨字同音異に「夏, 大也(胡雅切), 夏, 木也(古雅切, 禮夏楚二物, 收其威也⁸¹⁾)」, 卷六・辨字音疑混に「四方廣大曰夏(胡賈切, 中夏也), 萬物盛大曰夏(胡嫁切, 冬夏也)」。季節の「夏」は去聲, 「大也」と訓じられる「夏」, 「中夏」の「夏」は上聲のようである。『釋文』では「大也」と訓じられる「夏」, 王朝名, 「子夏」, 「夏姬」の「夏」に「戸雅反」, 「胡雅反」という反説を附す。二十

78) 小雅・鶴鳴

79) 大雅・文王, 大雅・江漢

80) 鄭箋は「莫肯下遺」を「無肯謙虛以禮卑下先人」と釋す。

81) 『禮記』學記

卷本も反切を用いるが、八卷本は聲調を用いている。なお、濁音であったためか、現代語では第四聲の xià 一音のみである。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
秦・權輿	夏 ⁸²⁾	胡雅反	×	×
陳・株林	夏姬	戸雅反	戸雅反	上聲
大雅・皇矣	謂夏	戸雅反, 下文長夏 ⁸³⁾ 並注同 (傳釋文)	(傳釋文)	(傳釋文)
大雅・蕩	夏后	戸雅反	×	×
周頌・時邁	時夏 ⁸⁴⁾	戸雅反	戸雅反	×
周頌・思文	時夏	戸雅反	×	×
學而	子夏	戸雅反	×	
爲政	於夏	戸雅反, 餘以意求之	×	

(54) 先 xiān

『廣韻』下平一先(蘇前切)に「先後也, 又姓, …… , 又蘇薦切」, 去三十二霰(蘇田切)小韻に「先, 先後, 猶娣姒, 又姓, 出河東, 又蘇前切」, 『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「先, 前也(思天切, 對後之稱), 前之曰先(思見切, 詩傳, 相導前後曰先後⁸⁵⁾)」。『羣經音辨』によると、「先」なら平聲, 「先んずる」なら去聲のようである。『釋文』でも動詞に去聲の反切が附くが、八卷本、『章句』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
小雅・小弁	先(之)	蘇薦反	蘇薦反, 叶蘇晉反	去聲, 叶蘇晉反
大雅・緜	先 ⁸⁶⁾	蘇薦反	息薦反	去聲
大學 78	先後	×	去聲	

(55) 鮮 xiān

『廣韻』下平二仙(相然切)に「鮮, 鮮潔也, 善也, …」上二十八獮(息淺切)に「鮮, 少也」⁸⁷⁾, 『羣經音辨』卷四・辨字同音異に「鮮, 魚也, 善也(相然切), 鮮, 少也(息淺切)」といい, 現代語でも「新鮮」の「鮮」は xiān, 「少ない」という意味の「鮮」は xiǎn である。『釋文』では「少ない」の「鮮」に反切が付き, 二十卷本は反切を用いるが, 八卷本、『集注』、『章句』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
邶・新臺	不鮮	斯踐反, 鄭善也, …, 依鄭又音仙	斯踐反, 叶想止反	斯淺反, 叶想止反

82) 毛傳「夏, 大也」

83) 毛傳は「夏」を「大」と讀みかえ, 鄭箋は「夏, 諸夏」とする。

84) 毛傳「夏, 大也」

85) 『毛詩』大雅・緜「予曰有先後」傳「相道前後曰先後」, また『尚書』君奭「先後」釋文に「毛詩傳云, 相導前後曰先後」

86) 上注参照。

87) また, 去三十三線(私箭切)に「鮮, 姓也, 本音平聲」。

鄭・揚之水	終鮮	息淺反, …, 注下同	息淺反	上聲
小雅・蓼莪	鮮民	息淺反	息淺反	上聲
小雅・北山	鮮我	息淺反, 沈云鄭音仙	息淺反	×
小雅・車牽	鮮我	息淺反, 徐音仙	息淺反	×
小雅・苕之華	鮮可	息淺反	息淺反	上聲
大雅・皇矣	鮮	息淺反, 又音仙	息淺反	×
大雅・蕩	鮮克	息淺反	×	×
大雅・抑	鮮不	息淺反	息淺反	上聲
大雅・烝民	民鮮	息淺反	息淺反	上聲
學而	鮮	仙善反	上聲, 下同	
里仁	鮮矣	仙善反	上聲	
雍也	民鮮	仙善反	上聲	
衛靈公	鮮	仙善反	上聲	
中庸 10	民鮮	息淺反, 下及注同, 罕也	上聲, 下同	
大學 59	鮮矣	仙善反, 注同	上聲	

(56) 相 xiāng

『廣韻』下平十陽・襄（息良切）小韻に「相, 共供也, 瞻視也, …, 又息亮切」, 去四十一漾・相（息亮切）に「視也, 助也, 扶也, …, 又息良切」, 『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「相, 共也（息良切）, 共助曰相（息亮切）」。現代語でも「たがいに」の意なら xiāng, 「助ける」の意や「宰相」の「相」なら xiàng である。『釋文』では「相る」^み「相ける」^{たす}「宰相」の意の「相」に反切が付き, 二十卷本も反切を用いるが, 八卷本, 『集注』はそれを聲調で記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
鄘・相鼠	相鼠 ⁸⁸⁾	息亮反, 篇内同	息亮反	去聲
小雅・伐木	相彼 ⁸⁹⁾	息亮反	息亮反	去聲
小雅・節南山	相爾 ⁹⁰⁾	息亮反	息亮反	去聲
小雅・小弁	相彼 ⁹¹⁾	息亮反	息亮反	去聲
小雅・四月	相彼 ⁹²⁾	息亮反	息亮反	去聲
大雅・棫樸	其相 ⁹³⁾	如字, 一云, 鄭息亮反	×	×
大雅・生民	有相 ⁹⁴⁾	息亮反	息亮反	去聲
大雅・公劉	相其 ⁹⁵⁾	息亮反	息亮反	去聲
大雅・抑	相在 ⁹⁶⁾	息亮反	息亮反	去聲
大雅・桑柔	其相 ⁹⁷⁾	毛如字, …, 鄭息亮反	息亮反, 叶平聲	去聲, 叶平聲

88) 毛傳「相, 視也」

89) 鄭箋「相, 視也」

90) 鄭箋「相, 視也」

91) 鄭箋「相, 視」

92) 鄭箋「相, 視也」

93) 毛傳「相, 質也」, 鄭箋「相, 視也」。

94) 鄭箋は「有相之道」を「有見助之道」と釋す。

95) 鄭箋は「相」を「觀相」に置き換えて釋す。

96) 鄭箋「相, 助」

97) 毛傳「相, 質也」, 鄭箋「相, 助也」

大雅・雲漢	不相 ⁹⁸⁾	毛如字, 鄭息亮反	×	×
大雅・韓奕	相攸 ⁹⁹⁾	息亮反	息亮反	去聲
大雅・召旻	我相 ¹⁰⁰⁾	息亮反	息亮反	去聲
周頌・清廟	顯相 ¹⁰¹⁾	息亮反	息亮反	去聲
周頌・雝	相維 ¹⁰²⁾	息亮反	息亮反	息亮反
周頌・雝	相	×	同上	同上
商頌・長發	相土	息亮反	息亮反	×
八佾	相維	息亮反	去聲	
先進	小相	息亮反	去聲	
憲問	又相	息亮反	去聲	
衛靈公	相師	息亮反	去聲	
季氏	相矣	息亮反, …, 下相夫子同	去聲, 下同	
中庸 196	相在	息亮反, 注同	去聲	

(57) 行 xíng

『羣經音辨』卷一・辨字同音異・行部に「行, 歩趨也(戸庚切)行, 列也(胡剛切)行, 人所施也(下孟切)行行, 剛彊也(戸浪切, 論語子路行行¹⁰³⁾」, 卷六・辨字音清濁に「行, 履也(戸庚切), 履迹曰行(下孟切, 或履而有所察視, 亦曰行)」という。又、『廣韻』下平十一唐・航(胡郎切)小韻に「行, 伍也, 列也」, 下平十二庚・行(戸庚切)に「行歩也, 適也, 往也, 去也, …」, 去四十二宕・吭(下浪切)小韻に「行, 次第」, 去四十三映・行(下更切)に「景迹, 又事也, 言也」。現代漢語では「戸庚切」に對應する xíng, 「胡剛切」「胡郎切」に對應する háng, 「戸浪切」「下浪切」に對應する hàng の音の違いは存在し, 「下孟切」「下更切」に對應する xìng は『新華字典』『現代漢語詞典』などに名詞の「行為」の意味で用いられる「行」の「旧讀」として載せられている。意味も hàng のほかは『新華字典』『現代漢語詞典』に記載されるものと對應する。『釋文』は「行為」を意味する「行」には「下孟反」, 「列」の意の「行」には「戸郎反」と反切で音を附すが, 八卷本は直音と聲調, 『集注』は聲調を用いる。先進篇の「行行如たり」の「行」については『釋文』は「胡浪反, 剛貌, 或戸郎反」と去聲と平聲の二切を挙げ, 『集注』は去聲の「胡浪反」を採る。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
周南・卷耳	周行 ¹⁰⁴⁾	戸康反	叶戸郎反	叶戸郎反
邶・雄雉	德行	下孟反, 下注皆同	下孟反, 叶戸郎反	下孟反, 叶戸郎反
邶・北風	同行 ¹⁰⁵⁾	音衡	叶戸郎反	叶戸郎反

98) 鄭箋は「胡不相」を「何不助我」と釋す。

99) 鄭箋「相, 視」

100) 傳箋に「相」の解釋はないが, 疏は「相」を「視」に置き換え解釋する。

101) 毛傳「相, 助也」

102) 毛傳「相, 助」

103) 先進。下文参照。

104) 毛傳「行, 列也」

105) 毛傳「行, 道也」

『經典釋文』と朱熹注音

衛・氓	百行	下孟反	下孟反, 叶戸郎反	去聲, 叶戸郎反
鄭・大叔于田	鷹行	戸郎反	戸郎反	音杭
魏・汾沮洳	公行 ¹⁰⁶⁾	戸郎反	戸郎反	音杭
唐・鶉羽	鶉行	戸郎反	戸郎反	音杭
秦・黃鳥	仲行 ¹⁰⁷⁾	戸郎反, 下皆同	戸郎反	音杭
豳・東山	勿士行	毛音衡, 鄭音衡, 王戸剛反	戸郎反	音杭
小雅・鹿鳴	周行 ¹⁰⁸⁾	毛如字, …, 鄭胡郎反	叶戸郎反	叶音杭
小雅・六月	啓行	戸郎反	叶戸郎反	叶戸郎反
小雅・大東	周行 ¹⁰⁹⁾	戸郎反, 注周行、下載施之行并注同	叶戸郎反	叶戸郎反
小雅・大東	行	×	戸郎反	音杭
小雅・車牽	景行(行)	下孟反	×	×
小雅・都人士	士行	下孟反, 下文行歸、注操行同	(箋釋文)	(箋釋文)
大雅・抑	德行	下孟反	下孟反	去聲
大雅・常武	行 ¹¹⁰⁾	戸剛反	戸郎反	音杭
周頌・天作	之行	如字, …, 王徐並下孟反	叶戸郎反	叶戸郎反
周頌・敬之	德行	下孟反	下孟反, 叶戸郎反	去聲, 叶戸郎反
學而	行有	下孟反	×	
學而	(其行)	上「行」釋文に「下云觀其行并注同」	去聲	
爲政	行	下孟反	去聲	
里仁	行	下孟反	去聲	
公冶長	其行	下孟反	去聲	
雍也	而行	下孟反, 又如字	×	
述而	文行	下孟反	去聲	
先進	德行	下孟反	去聲	
先進	行行	胡浪反, 剛貌, 或戸郎 ¹¹¹⁾ 反	胡浪反	
顏淵	而行	下孟反	去聲	
子路	行必	下孟反	去聲	
憲問	危行	下孟反	去聲	
憲問	其行	下孟反, 或如字	去聲	
衛靈公	行篤	下孟反, 下行不篤敬亦同	(行篤、行不之行、)	去聲
中庸 43	言顧行行顧言	皆下孟反, 注聖人之行同, 或一讀皆如字	×	
中庸 98	力行	皇如字, 徐下孟反	×	
中庸 112	行前	下孟反	去聲	
中庸 153	行同倫	下孟反	去聲	

(58) 焉 yān

『廣韻』下平二仙・焉(於乾切)に「何也, …」, 馮(有乾切)小韻に「焉, 語助也, 又於乾

106) 毛傳「公行, 從公之行也」, 鄭箋「從公之行者, 主君兵車之行列」。

107) 鄭箋「仲行, 字也」

108) 毛傳「行, 道也」, 鄭箋「周行, 周之列位也」

109) 鄭箋「周行, 周之列位也」

110) 鄭箋は經文の「陳行」を「陳列」に置き換えて釋す。

111) 通志堂本は「郎」一字衍。

切」¹¹²⁾、『羣經音辨』卷六・辨彼此異音に「焉，何也，常居語初（於乾切），焉，已也，常居語末（于乾切）」。「何也」は影母，「已也」は匣母である。『釋文』は疑問詞の「焉」に反切を附けるが、『詩集傳』、『集注』、『章句』もそれを襲用する。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
衛・伯兮	焉得	於虔反	於虔反	音煙
小雅・白駒	於焉	於虔反，又如字	×	×
爲政	人焉	於虔反	於虔反	
八佾	焉得	於虔反	於虔反	
里仁	焉得	於虔反	於虔反	
公冶長	斯焉	於虔反	於虔反	
公冶長	焉用	於虔反	於虔反	
公冶長	焉	於虔反	於虔反	
公冶長	焉	於虔反	於虔反	
公冶長	焉	如字，衛瓘於虔反，爲下句首	如字，屬上句	
子罕	焉知	於虔反	於虔反	
先進	焉能	上於虔反	於虔反	
顏淵	焉用	於虔反	於虔反	
子路	焉知	於虔反	於虔反	
子路	焉	×	於虔反	
季氏	焉用	於虔反	於虔反	
陽貨	焉用	於虔反	於虔反	
陽貨	焉能	於虔反	於虔反	
微子	焉往	於虔反	於虔反	
子張	焉	於虔反	於虔反	
子張	焉可	於虔反	於虔反	
子張	焉學	於虔反，下不學同	於虔反	
子張	(焉不學)	×(上文「焉學」釋文に「於虔反，下不學同」)	於虔反	
堯曰		×	於虔反	
中庸 179	夫焉	於虔反	於虔反	

(59) 厭 yàn

『廣韻』上五十琰・𦉳（於琰切）小韻に「厭，厭魅也，又於艷切」，去五十五豔・厭（於豔切）に「論語曰食不厭精¹¹³⁾」，入二十九葉・𦉳（於琰切）小韻に「厭，厭伏，亦惡夢，又於琰切」。『羣經音辨』卷四・「厭厭，安也（於鹽切，詩厭厭夜飲¹¹⁴⁾），厭，足也（於豔切），厭，塞也（於頰切，論語天厭之¹¹⁵⁾），厭，閉藏也（烏斬切，禮見君子而後厭然¹¹⁶⁾，又烏簞切）厭，覆也（烏狎切，禮死而不弔曰厭¹¹⁷⁾）厭湴，溼也¹¹⁸⁾（於十、於占、於葉三切）厭，服也（於驗切，鄭康成說，

112) また，上平二十二元・焉（謁言切）小韻に「焉，安也，又不言也」。

113) 鄉黨

114) 小雅・湛露，表参照。

115) 雍也

116) 『禮記』大學，表参照。

117) 『禮記』檀弓上に「死而不弔者三，畏、厭、溺」。

118) 召南・行露，表参照。

禮不服教而有獄訟謂不厭服於十二教者¹¹⁹⁾、又於涉切)、『釋文』では、擬態語の「厭」や「厭く」、
「厭う」などの意の「厭」に反切を附ける。八卷本は聲調で音を記す。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
召南・行露	厭 ¹²⁰⁾	於葉反，徐於十反，又於立反，沈又於占反	於葉反	入聲
秦・小戎	厭厭 ¹²¹⁾	於鹽反	於鹽反	平聲
小雅・湛露	厭厭 ¹²²⁾	於鹽反	於鹽反	平聲
小雅・小旻	既厭 ¹²³⁾	於豔反	×	×
周頌・載芟	有厭 ¹²⁴⁾	於豔反，下同	×	×
雍也	天厭	於琰反，…，又於豔反	×	
述而	不厭	於豔反	×	
述而	不厭	於豔反	×	
鄉黨	厭精	於豔反	×	
憲問	不厭	於豔反	×	
中庸 30	不厭	於豔反	×	
中庸 160	不厭	於豔反，後皆同	×	
中庸 192	不厭	於豔反	×	
大學 13	厭	讀爲厭，烏斬反，徐又烏簞反，厭然，閉藏貌也	鄭氏讀作厭	

(60) 衣 yī

『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「衣，身章也（於希切），施諸身曰衣（於既切）」、『廣韻』上平八微・依（於希切）小韻「衣，上曰衣，下曰裳，…」，去八末・衣（於既切）「衣著」。現代漢語（普通語）でも「衣服」は yī，「穿（着る）」は yì で（『新華字典』『現代漢語詞典』），音と意味の對應は変わらない。「如字」は平聲の方で，去聲に讀む動詞の「衣」に音が附く。『釋文』、二十卷本は反切，八卷本、『集注』、『章句』は聲調で音を記す。

篇名	被注箇所	經典釋文	朱熹注音	
衛・碩人	衣錦	於既反	於既反	去聲
鄭・丰	衣錦	如字，或一音於記反，下章放此	於既反	去聲
小雅・斯干	載衣	於既反，…，下衣之楊同	於既反	去聲
公冶長	衣	×	去聲	
雍也	衣輕	於既反	去聲	
子罕	衣弊	於既反	去聲	
陽貨	衣	於既反	去聲	
中庸 184	衣錦	×	去聲	

119) 『周禮』地官・大司徒「凡萬民之不服教而有獄訟者」鄭注「不服教，不厭服於十二教」

120) 毛傳「厭浥，濕意也」

121) 毛傳「厭厭，安靜也」

122) 毛傳「厭厭，安也」

123) 經文「我龜既厭」を鄭箋は「卜筮數而瀆龜，龜靈厭之」と解釋する。

124) 毛傳「有厭其傑言傑苗厭然特美也」

(61) 易 yì

『羣經音辨』卷四・辨字同音異・易部に「易，平也（羊至切），易，變也（羊益切）」、『廣韻』去五寘・易（以豉切）に「難易也，簡易也，…」，入二十二昔・釋（羊益切）小韻に「易，變易，又始也，改也，奪也，轉也，…」。「平易」の意味だと去聲，「易える」「易わる」の意味だと入聲である。現代漢語（普通語）では意味による音の区別はなく，読みはすべて yì だが，現代日本語の漢字音には漢語の中古音の去聲と入聲と由来する読み分け，すなわち「容易」「難易」などという場合のイと「不易」「貿易」などという場合のエキの両音の区別が保存されている。音注が附くのは「難易」「簡易」の「易」（去聲）の方で、『釋文』、二十卷本は反切，八卷本、『集注』、『章句』は聲調で記す。

篇名	被注箇所	經典釋文	朱熹注音	
小雅・小弁	無易	夷豉反	夷豉反	去聲
小雅・何人斯	心易	夷豉反	以豉反，叶以支反	去聲，叶以支反
小雅・甫田	禾易	以豉反，…，徐以赤反	以豉反	圈點去声
大雅・文王	不易	毛以豉反，…，鄭音亦，…下文及後不易維王同	以豉反	去聲
大雅・大明	不易維王	×（文王「不易」釋文に言及あり）	以豉反	去聲
大雅・板	（孔）易也	鄭音亦	以豉反，叶夷益反	去聲，叶夷益反
大雅・抑	無易	以豉反	以豉反	去聲
周頌・敬之	不易	鄭音亦，王以豉反	以豉反	去聲
八佾	其易	以豉反	去聲	
泰伯	不易	孫音亦，鄭音以豉反	去聲	
子路	不易	以豉反	去聲	
子路	易事	以豉反	去聲	
憲問	驕易	以豉反	去聲	
憲問	易使	以豉反	去聲	
衛靈公	易知	以豉反	×	
陽貨	易使	以豉反	去聲	
中庸 49	居易	以豉反，注同，平安也	去聲	
大學 89	不易	以豉反，注同	去聲	

(62) 飲 yìn

『廣韻』上四十七寢・飲（於錦切）に「說文曰飲也，飲，上同」，去五十二沁・蔭（於禁切）に「飲，又於錦切」，『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「飲，酒漿也（於錦切），所以飲曰飲（於禁切）」、『羣經音辨』では「飲み物」が上聲，「飲む」が去聲とするようだが，『釋文』では，「飲ましむ」と讀む「飲」に去聲の「於鳩反」が附く。二十卷本は反切を用いるが，八卷本、『集注』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	經典釋文	朱熹注音	
唐・有杕之杜	曷飲	於鳩反，下文同	於鳩反	圈點去声
小雅・六月	飲御	於鳩反	於鳩反	去聲
小雅・緜蠻	飲食	於鳩反，…，篇内皆同（詩序釋文）	於鳩反	去聲
大雅・公劉	飲之	於鳩反	於鳩反	×
八佾	而飲	王於鳩反，…，又如字	去聲	

(63) 於 yú

『廣韻』上平九魚・於（央居切）に「居也，代也，語辭也，又商於地名，亦姓，……，又音烏」、上平十一模・烏（哀都切）小韻に「於，古作於戲，今作嗚呼」。『羣經音辨』卷二・辨字同音異に「於乎，歎辭也（音烏），於，往也（央居切）」。「釋文』では，感嘆詞の「於」に「音烏」という直音注が付くが，『詩集傳』、『集注』、『章句』も直音を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
小雅・伐木	於	如字，舊音烏	音烏	音烏
大雅・文王	於	音烏，…，注及下於緝并注皆同	音烏，下同	音烏下同
大雅・靈臺	於	×	音烏	音烏
大雅・靈臺	於	音烏，鄭如字，下於樂、於論皆同	×	×
大雅・抑	於	音烏，…，凡此二字（於乎）相連，音皆放此	音烏	音烏
大雅・桑柔	於	×	音烏	音烏
大雅・雲漢	於	×	音烏	音烏
大雅・召旻	於	×	音烏	音烏
周頌・清廟	於	音烏，…，後發句歎辭皆放此，以意求之	音烏	音烏
周頌・維天之命	於	×	音烏	音烏
周頌・維天之命	於	×	同上（音烏）	同上（音烏）
周頌・烈文	於	×	音烏	音烏
周頌・昊天有成命	於	×	音烏	音烏
周頌・臣工	於	音烏	音烏	音烏
周頌・鼐	於	鄭如字，王音烏	音烏	音烏
周頌・武	於	音烏	音烏	音烏
周頌・閔予小子	於	×	音烏	音烏
周頌・閔予小子	於	×	同上	圈点平声
周頌・訪落	於	×	音烏	圈点平声
周頌・酌	於	音烏	音烏	音烏
周頌・桓	於	音烏	音烏	音烏
周頌・賚	於	鄭如字，王於音烏	音烏	圈点平声
周頌・般	於	音烏	音烏	音烏
商頌・那	於	音烏	音烏	音烏
中庸 140	於穆	上音烏，下於乎亦同	音烏	
大學 32	於	音烏，下於緝熙同	（於戲，）音嗚（呼）	
大學 44	於緝	×	（於緝之於，）音烏	

(64) 雨 yǔ

『廣韻』上九麋・羽（王矩切）小韻に「雨，元命包曰，陰陽和爲雨，大戴禮云，天地之氣和則雨，說文云，水从雲下也，一象天門，象雲水霏其間也」，去十遇・芋（王遇切）「雨，詩曰雨雪其霧¹²⁵⁾，又音禹」。『羣經音辨』卷六，辨字音清濁に「雨，天澤也（王矩切），謂雨自上下曰雨（下王遇切）」。「雨る」「雨す」という動詞の場合，去聲に讀む。『釋文』でも動詞の「雨」に去聲の反切を付け，二十卷本も反切を用いるが，八卷本は聲調を用いる。

125) 邶風・北風

篇名	被注箇所	經典釋文	朱熹注音	
邶・北風	雨雪	于付反, 又如字, 下同	于付反	去聲
小雅・采薇	雨雪	于付反	于付反	去聲
小雅・出車	雨雪	于付反, 又如字	于付反	×
小雅・信南山	雨雪	于付反, 崔如字	于付反	去聲
小雅・大田	雨我	于付反, …, 一本主作注雨, 如字	于付反	圈點去声
小雅・頍弁	如雨	于付反, 卒章同	(詩序釋文)	(詩序釋文)
小雅・頍弁	雨	× (詩序釋文にあり)	于付反	去聲
小雅・角弓	雨雪	于付反, 注及下同	于付反	去聲

(65) 語 yǔ

『廣韻』上八語 (魚巨切) 「説文, 論也¹²⁶⁾」, 去九御 (牛据切) 「説也, 告也」。『羣經音辨』卷六・辨字音清濁「語, 言也 (仰舉切), 以言告之謂之語 (牛据切)」によれば, ことばという意味なら上聲, ことばを告げるという意味なら去聲のようである。現代語でも, 常用の音は yǔ だが, 「告訴」(告げる) の場合のみ yù と発音する。(『新華字典』)『釋文』は反切を用いるが, 『集注』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	經典釋文	朱熹注音	
小雅・賓之初筵	勿語	魚據反, 又如字	×	×
八佾	子語	魚據反	去聲	
雍也	語上	魚據反	去聲	
子罕	語之	魚據反	去聲	
子罕	法語之	魚據反	×	
子路	公語	魚據反	去聲	
陽貨	吾語	魚據反	去聲	
子張	語大夫	魚據反	去聲	

(66) 與 yǔ

『廣韻』上平九魚・余 (以諸切) 小韻に「歟, 説文云, 安气也, 又語末之辭, 亦作與, 與, 上同, 本又餘佇切」, 上八語・與 (余呂切) に「善也, 待也, 説文曰, 黨與也, …, 又余、譽二音」, 去九御・豫 (羊洳切) 小韻に「與, 參與也」, 『羣經音辨』卷一・辨字同音異・昇部に「與, 授也 (以呂切), 與, 及也 (余倨切), 與, 辭也 (羊諸切)」, 卷六・辨字音清濁に「與, 授也 (羊主切), 授而共之曰與 (余慮切)」。現代語でも疑問や反語または感嘆を表す句末の助辞「與」は yǔ, 「參與する」の意なら yù, その他, 「授與する」の意の動詞などは yǔ で, 『羣經音辨』の読み分けに對應する。上聲が「如字」で, 『釋文』は助辞と「參與」の意の「與」に直音で音を記す。『詩集傳』は『釋文』と同じく直音注を用いるが, 『集注』, 『章句』は聲調を記す。

126) 三篇上・言部に「言, 直言曰言, 論難曰語」。

『經典釋文』と朱熹注音

篇名	被注箇所	經典釋文	朱熹注音	
小雅・楚茨	與與	音餘	音餘	音餘
周頌・潛	與	音余	音余	音余
商頌・那	與	音余, 下同	音余	音余
商頌・那	與	×	×	圈点平声
學而	本與	音餘	平聲	
學而	之與	音餘, 下之與同	平聲, 下同	
學而	謂與	音餘	平聲	
八佾	救與	音餘	平聲	
八佾	吾不與	音預	去聲	
公冶長	由與	音餘	平聲	
公冶長	與	音餘, 語辭也, 下同	平聲, 下同	
公冶長	歸與歸與	音餘	平聲	
雍也	也與	音餘	平聲	
述而	誰與	如字, 皇音餘	×	
泰伯	人與	音餘	平聲	
泰伯	不與	音預	去聲	
子罕	得與	音預	去聲	
子罕	者與	音餘	平聲	
子罕	也與	音餘	平聲	
子罕	也與	音餘	平聲	
鄉黨	與與	音餘	平聲, 或如字	
先進	與	音餘	平聲	
先進	是與	音餘	如字	
先進	與	音餘 (, 下同)	平聲	
先進	與	× (上文「與」釋文に「音餘, 下同」)	平聲	
先進	也與	音餘	平聲	
顏淵	也與	音餘	平聲	
顏淵	德與	音餘	平聲	
子路	其與	音預	去聲	
憲問	者與	音餘	平聲	
憲問	也與	音餘	平聲	
憲問	者與	音餘	平聲	
憲問	者與	音餘	平聲	
衛靈公	者與	音餘, 下非與、也與同	平聲, 下同	
衛靈公	與	×	平聲	
衛靈公	不與	音預	×	
衛靈公	者與	音餘	平聲	
衛靈公	道與	音餘	平聲	
季氏	過與	音餘 (, 下同)	平聲	
季氏	與	× (上文「過與」釋文に「音餘, 下同」)	平聲	
季氏	謂與	音餘	平聲	
陽貨	也與	音餘	平聲	
陽貨	與	音餘	平聲	
陽貨	與哉	音餘, 本或作無哉	平聲	
微子	丘與	音餘	平聲	
微子	孔子之徒與	音餘	平聲	
微子	徒與誰與	並如字, 又並音餘	如字	
微子	齊與	音餘	平聲	
子張	賢與	音餘	平聲	
中庸 15	也與	音餘, 下強與皆同	平聲	
中庸 28	強與	× (上文に「音餘, 下強與皆同」)	平聲	

中庸 35	以與	音預, 注皆與之與、以其與同	去聲
中庸 69	也與	音餘	平聲
中庸 150	謂與	音餘	平聲

(67) 予 yǔ

『廣韻』上平九魚・余（以諸切）小韻に「予，我也，又餘佇切」，上八語・與（余呂切）小韻に「予，郭璞云，予猶與也，又弋諸切」。『羣經音辨』卷二・辨字同音異に「予，我也（以諸切），予推與也（以主切）」。「第一人称代名詞は平聲、「予^{あた}える」という意の場合には上聲である。『釋文』は上聲の「予」に反切、直音を用いて音を付け、『詩集傳』は直音を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
鄘・干旄	何以予之	×	音與	音與
小雅・采菽	所予	音與	音與	音與
小雅・采菽	予	×	音與	音與
大雅・大明	維予	毛羊蘆反，鄭羊呂反	×	×
公冶長	宰予	羊汝反，或音餘	×	

(68) 遠 yuǎn

『羣經音辨』卷六に「遠，疏也（於阮切，對近之稱），疏之曰遠（于眷切，論語恭鬼神而遠之）」，『廣韻』上二十阮・遠（雲阮切）に「遙遠也」，去二十五願・遠（于願切）に「離也」。「遠い」なら上聲，「遠ざける」なら去聲である。現代漢語は yuǎn 一音である。『釋文』は去聲の「遠」に反切を附し，二十卷本も反切を用いるが，八卷本，『集注』，『章句』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
邶・泉水	遠父	于萬反	于萬反	去聲
鄘・蟋蟀	遠父	于万反，下同	于萬反	去聲
鄘・載馳	不遠	于万反，…，協句如字	×	×
衛・竹竿	遠莫	如字，又于万反	×	×
衛・竹竿	遠兄	于万反	于萬反	去聲
王・葛藟	終遠	于万反，又如字，注下皆同	于萬反	去聲
小雅・白華	之遠	于願反，…，又如字，注及下皆同	×	×
學而	遠恥	于萬反	去聲	
雍也	而遠	于萬反	去聲	
泰伯	斯遠	于萬反	去聲	
顏淵	遠矣	如字，又于萬反	如字	
衛靈公	遠佞	于萬反	去聲	
衛靈公	遠怨	于萬反，注同	去聲	
季氏	之遠	于萬反	去聲	
陽貨	遠之	于萬反	去聲	
中庸 103	遠色	于萬反	去聲	
中庸 158	遠之	如字，又于萬反	×	
大學 105	能遠	于萬反	去聲	

(69) 知 zhī

『廣韻』には「知」（上平五支・陟離切）も「智」（去五寘・知義切）も一音のみである。現

代語でも知は zhī, 智は zhì である。『羣經音辨』卷六・辨字音清濁に「知, 識別也 (張离切), 識謂之知 (張義切)」といい, 「知」について名詞なら「智」と同じ去聲に讀むとする。『釋文』も名詞の「知」に直音で音を附け, 『集注』、『章句』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
大雅・抑	未知	如字, 沈音智, 下夙知亦同	×	×
爲政	知也	如字, 又音智	×	
里仁	知	音智, 注及下同	去聲	
里仁	知	×	去聲	
公冶長	其知	音知?	去聲	
公冶長	未知	如字, 鄭音智	如字	
公冶長	則知	音智	去聲	
雍也	問知	音智 (, 下章及注同)	去聲	
雍也	知	× (上文「問知」釋文に「下章及注同」)	去聲	
子罕	知者	音智	×	
顔淵	問知	音智, 下同	去聲	
顔淵	知人	× (上文「問知」釋文に「音智, 下同」)	如字	
憲問	之知	音智	去聲	
憲問	知者	音智	去聲	
衛靈公	知者	音智	去聲	
衛靈公	知及	音智	去聲	
陽貨	謂知	音智	去聲	
陽貨	(上知)	×	去聲	
陽貨	(好知)	× (上章注「知」釋文に「音智」)	去聲	
陽貨	爲知	音智	去聲	
子張	爲知	音智	去聲	
中庸 11	知者	音智, 下文大知也、予知、注有知皆同	去聲	
中庸 14	大知	× (上文に「音智, 下文大知也…皆同」)	去聲	
中庸 17	予知	× (上文に「音智, 下文…予知…皆同」)	去聲	
中庸 94	知仁	音智, 下近乎知、注言有知皆同	去聲	
中庸 124	知也	音智, 注同	去聲	
中庸 168	知	音智, 下聖知同	去聲	
中庸 183	聖知之知	×	去聲	
大學 4	其知	如字, 徐音智, 下致知同	×	

(70) 治 zhi

『廣韻』上平七之・治 (直之切) に「水名」, 去六至・緻 (直利切) に「治, 理也」, 去七志・值 (直吏切) に「治, 理也」。『廣韻』には去聲については至韻、志韻の二音があるが意味の違いはなく, 平聲の「治」は川の名で, 常用の「治」は去聲のみのようなだが, 『羣經音辨』卷六「治, 理也 (直基切), 致理成功曰治 (直吏切)」によれば, 「おさめる」が平聲で, 「おさまる」が去聲のようである。去聲の「治」に音が附くが, 『釋文』は反切, 『詩集傳』、『集注』、『章句』は聲調である。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
邶・緑衣	女所治兮	×	平聲	平聲
泰伯	天下治	直吏反	去聲	
衛靈公	而治	直吏反	×	
中庸 93	而治	直吏反，一音如字	×	
大學 3	治其國	×	平聲，後放此	
大學 6	國治國治	並直吏反，下同	去聲，後放此	

(71) 中 zhōng

『廣韻』に上平一東・中（陟弓切）に「平也，成也，宜也，堪也，任也，和也，半也，又姓…，又陟仲切」，去一送・中（陟仲切）に「當也，…，又陟弓切」。現代語でも通常は zhōng と讀むが，「中毒」「命中」など「當たる」の意なら zhòng と讀む。『羣經音辨』卷一・辨字同音異に「中，和也（陟弓切），中，適也（陟用切），中，伯仲也（持用切）」，卷六・に「中，任也（陟弓切），任得宜曰中（陟仲切）」。「仲」に通じる「中」は韻は「當也」の「中」と同じだが濁音である。『釋文』では「當也」の「中」に反切が付き，『集注』、『章句』は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
商頌・長發	中葉	如字，又張仲反	×	×
雍也	中道	如字，一音丁仲反	×	
先進	有中	丁仲反	去聲	
先進	屢中	丁仲反	去聲	
子路	不中	丁仲反	去聲	
微子	言中	丁仲反，下同	去聲，下同	
中庸 8	中節	丁仲反，下注爲之中同	去聲	
中庸 114	而中	丁仲反，又如字，下中道同	(中) 並去聲	
大學 64	不中	丁仲反，注同	去聲	

(72) 重 zhòng

『廣韻』上平三鍾・重（直容切）に「複也，疊也，直容切，又直勇、直用二切」，上二腫・重（直隴切）に「多也，厚也，善也，慎也，直隴切，又直龍、直用二切」，去三用・重（柱用切）に「更爲也，柱用切，又直容切」とあり，「重複」「雙重」などの場合は平聲，「重力」「重罪」などの場合は上聲，「重ねて」「さらに」の意を表す場合は去聲であると，三音の區別が明記されている。『羣經音辨』では卷六・辨字音清濁に「重再也（直龍切）再之曰重（直用切）」とあり，平聲と去聲の區別だけに觸れる。『釋文』では反切を用い，二十卷本も反切を用いるが，八卷本は聲調を用いる。

篇名	被注箇所	釋文	朱熹注音	
衛・淇奥	重	直恭反	直恭反	平聲
鄭・清人	重	直龍反，注下同	直龍反	平聲
齊・盧令	重環	直龍反，下同	直龍反	平聲
爾・七月	黍稷重	直容反，…，先種後熟曰重，又作種，音同	直容反	平聲

小雅・無將大車	自重	直龍反, 又直用反	直勇、直龍二反	上平二聲
魯頌・閟宮	重	直容反, 本又作種同	直龍反	平聲
魯頌・閟宮	重弓	直龍反	直龍反	平聲

三 おわりに——調査結果

以上、『毛詩』、『論語』、『禮記』大學、中庸の經文に附された多音字の注について、『釋文』と朱熹注釋を比較した。二十卷本は概ね『釋文』の音を襲用するが、八卷本、『四書集注』は意味の違いに対応する音の違いが聲調で特定できる場合は、聲調を用いることが多い。『釋文』直音注には、直音注を用いることで被注字が本字本音で讀むべであることを示す場合があるが、そのような場合でも、複数の音の違いが聲調で區別できるときは『四書集注』は聲調を用いる。

以上の調査結果は、形態論のテーマとして扱われるような精緻な四聲別義の體系は宋以後に整えられたものだという假説を補強するデータの一つになるのではないと思われる。

主要参考文献

- 森賀一恵 2000 「四聲別義と『羣經音辨』」(『興膳教授退官記念中国文学論集』, 汲古書院, p. 501-514)。
 森賀一恵 2010 「論語音對照表」(『富山大學人文學部紀要』 53, p.103-137)
 森賀一恵 2011 「『大學章句』、『中庸章句』の音注について」(『富山大學人文學部紀要』 55, p.115-135)

本稿は平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「音注の訓詁学的研究」(課題番号 20520377) の成果の一部である。